

連続公開シンポジウム
「司書教諭資格付与科目の教育実践を検討する」
第1回「学校経営と学校図書館」記録

(2016年3月6日(土) 実施; 立教大学池袋キャンパスにおいて)

開会のご挨拶

今日はみなさま、お忙しい中、お集まりくださいます、ありがとうございます、中村百合子です。このシンポジウムは5回になっています。今日は「学校経営と学校図書館」なのですけれども、このあと各科目を隔月に行っていくと。で、最終回が11月、で、9月と11月の回は大阪教育大学のお部屋をお借りして、関西で実施することにいたしました。関西の方たちにも関心をもってもらえればと思った次第です。

この教育実践の共有というのは、司書教諭の資格とか司書の資格についてですね、実は関西では結構行われてきていたのではないかとこのように認識しています。日本図書館協会の図書館学教育のグループの会合だとか、日図研ー日本図書館研究会ーのほうの会合だとかの形でやっていたのではないかと思うのですけれども、全部の教育実践が、記録に残されているのを知らなくて、かつ関東のほうでは教育実践の共有の機会も少なかったのかなという感じがしています。それで今日を企画したということです。

高度化、高度化というのですけれども、[資格付与のための]単位の数を増やしたいとかというような話にすぐなってしまうと、単位の話とかカリキュラムの科目の構成の話がよくされていて、十分に高度化の本質の部分まで考える機会がなかったのではないかなというふうにも私は思っています。そんなわけでこれを企画したという次第です。

私はつねづね足立[正治]先生の教育実践を、一緒にお茶をしたり食事をしたりしながら、大学でどんなことを教えていらっしゃるのか、うかがってきていて、ちらちらとうかがうと、非常に興味深い、私もその授業に出てみたいと思うような、そういう内容でした。それで、足立先生に声をかけて一緒に教育実践を報告して、そしてフロアからいろいろもんでもらうというのをやったらどうかと思うのだけど協力してもらえないかということで、企画が現実味を帯びてきて、今日の日を迎えられたという次第でございます。

今日これから、私が一人でしゃべっているようで恐縮なのですが、15分なり10分なり、戦後史の話をしたと思います。

(「司書教諭養成の戦後史」の記録は略)

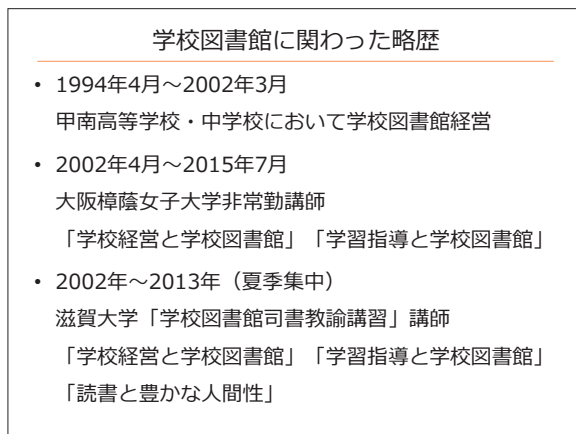
足立正治「学校経営と学校図書館」の教育実践

足立です。どうぞよろしくお願いします。

中村さんからこの企画を相談されて、少しは協力させていただいたのですが、いつもなんか、どう言ったらいいかな、場違いな感じがしながら学校図書館の皆さんの会に出席したりしていて、20年近く経った今日も、企画には賛成して、いいことだからやりましょう、ということなのだけど、いざお前が発表しろと言われると、本当に僕が発表して、自分の実践を皆さんに申しあげること何かいいことがあるのか自信がないので、出だしがとっても自信のなさそうな言い方をしている。



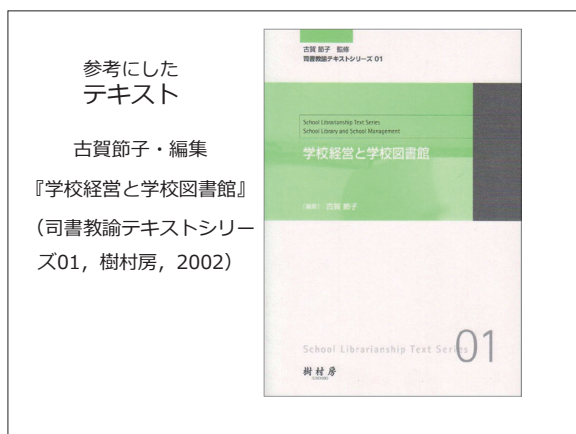
なぜ私がとまどっているか、ということなのですが、先ほどの中村さんの話（司書教諭養成の戦後史）を聞いて、ますます私は委縮してしまいました。実はですね、図書館の利用者として以上に図書館に関心をもったことがなかったのです、1994年までは。その時、私は50歳を超えていました。



校務の関係でやむを得ずという感じで、まあ別にいやでもなかったのですがね、情報教育の一環として学校図書館経営を任されたといえはかっこいいけれども、図書館のこと何も知らない人間が担当して、2002年3月まで務めたわけです。やめた途端に、なんか回り合わせなのですよね、二つの大学（滋賀大学と大阪樟蔭女子大学）から、その間に知り合った方々から推薦していただいたということで、こういう科目（「学校経営と学校図書館」と「学習指導と

学校図書館」）を担当しないかと言われたのです。ここに一つの大きな問題があると思うのです。さっきの話との絡みで言いますと、私は「図書の整理」2単位で司書教諭の資格をいただきました。というのも8年間の間に一定の年数に達したわけですね。それで、図書館の担当者が資格をもっていないのはおかしい、というので、関西ですから、大阪教育大学の講習に夏4日間だけ行って、『組織資料論』とかいう本を渡されて分類の練習をさせられて、資格はもらったのですが、ペーパードライバーと同じで、その後まったく使っていないものですから、図書の整理は全然できません。そういう人間が担当していいのかというジレンマがあった、ということをお察しいただきたいと思います。

この他にも南山大学であるとか、現在は大阪大学外国語学部ですが、前身の大阪外大のときは司書教諭の授業があったのです。その最後の4年間を担当させていただいた。そんな経歴です。



今日は著者がお見えになるとは思っていなかったのですが、これは想定外ですが、実は苦肉の策で、講師をしながら、自分自身の勉強にもしようと思って、このテキスト（古賀節子編『学校経営と学校図書館』樹村房、2002.）にすぎる思いで、お世話になりました。で、これを自分が勉強したいということで、曲がりなりに始めたわけです。

本科目が目指すもの

本科目は、情報やメディアを単に収集・整理・保存・提供する図書館サービスのあり方を図書館内部の問題として扱うだけではなく、その背景にある目的と理論を理解し、さらに学校教育の目的達成を支援する図書館のあるべき姿について論じ、学習とその指導にあたる教師と司書教諭との協調（コラボレーション）の重要性とその実践についての理解を目指すものである。（テキスト「序文」より）

このテキストで、私が感銘を受けた言葉がいくつかあるわけですが、序文に「本科目は、情報やメディアを単に収集・整理・保存・提供する図書館サービスのあり方を図書館内部の問題として扱うだけではなく、その背景にある目的と理論を理解し、さらに学校教育の目的達成を支援する図書館のあるべき姿について論じ、学習とその指導にあたる教師と、司書教諭との協調（コラボレーション）の重要性とその実践についての理解を目指すものである」という、

この一つの文章の中に非常に重要なキーワードが隠されていて、隠されていないですね、表れているわけですが、私はこの言葉に勇気づけられて何とか役割を果たした。

テキストの構成（目次より）

第1章 教育と学校図書館	第8章 学校図書館経営のための諸組織
第2章 学校図書館の発達と役割	
第3章 制度としての学校図書館	第9章 学校図書館の会計
第4章 教育課程と学校図書館	第10章 学校図書館経営
第5章 学校経営と学校図書館	第11章 学校図書館活動
第6章 学校図書館メディア	第12章 学校図書館活動の実際
第7章 学校図書館の施設・設備	第13章 学校図書館の評価と改善
	第14章 学校図書館の課題と展望

こういった章立てになっているわけですね。

設定した講習の目的

- ・ 現実社会の文脈の中で学校教育のありようを問い直し、学校図書館が果たすべき役割を考える
- ・ 学習者一人ひとりの多様なニーズに応えるメディア・センター（コミュニケーション・センター）としての学校図書館のヴィジョンを形成する
- ・ 情報とメディアのリテラシーを培う教育のコーディネーターとしての司書教諭の役割を認識する

これを使いまして、私なりの、図書館の専門家ではないので、教員として、その当時はまだ現職でしたから、学校の教育に携わるものとして学校図書館をどう捉えたらいいかという観点から、「現実社会の文脈の中で学校教育のありようを問い直し、学校図書館が果たすべき役割を考える」というのが一つ、要するに学校図書館を通して学校教育のありようをもう一回問い直してみたいという私自身の願望でもあったわけですね。それからもう一つ「学習者一人ひとりの多様なニーズに応えるメディア・センター（コミュニケーション・センター）としての学校図書館のヴィジョン」という、この「一人ひとりの多様なニーズに応える」というところが、これまでの学校教育、そして自分自身もおろそかにしていて、そこがとっても不十分だと感じていたので、そこのところを学校図書館を活用することによって何とかできないか、という思いがあったわけです。それと、これからの時代を見据えて「情報とメディアのリテラシーを培う教育のコーディネーターとしての司書教諭の役割を認識する」という…これらは私なりに設定した講習の目的です。

この講習の目的は、現実社会の文脈の中で学校教育のありようを問い直し、学校図書館が果たすべき役割を考える、学習者一人ひとりの多様なニーズに応えるメディア・センター（コミュニケーション・センター）としての学校図書館のヴィジョンを形成する、情報とメディアのリテラシーを培う教育のコーディネーターとしての司書教諭の役割を認識する、という三つの目的を設定した。この講習は、学校図書館のありようを問い直し、学校図書館が果たすべき役割を考える、という一つの目的を、学校図書館を通して学校教育のありようをもう一回問い直してみたいという私自身の願望でもあったわけですね。それからもう一つ「学習者一人ひとりの多様なニーズに応えるメディア・センター（コミュニケーション・センター）としての学校図書館のヴィジョン」という、この「一人ひとりの多様なニーズに応える」というところが、これまでの学校教育、そして自分自身もおろそかにしていて、そこがとっても不十分だと感じていたので、そこのところを学校図書館を活用することによって何とかできないか、という思いがあったわけです。それと、これからの時代を見据えて「情報とメディアのリテラシーを培う教育のコーディネーターとしての司書教諭の役割を認識する」という…これらは私なりに設定した講習の目的です。

テキストの再構成

- ・ 最初の数年間は、テキストを中心に授業を展開し、補足的に関連資料の提供、実践事例の紹介、調査課題の提示などをおこなった
- ・ テキストの内容を精査し、項目の扱い方を変え、新たな項目を追加するなどして授業内容の再構成をおこなった
 - － 例えば「学校図書館の会計」は「学校図書館の経営活動」の一部として軽く触れる程度にする、学校図書館経営の評価にルブリックの作成を加える、など・・・
 - － テキストは使用しないが、基本的な項目はテキストの内容をカバーした

最初の数年間は、テキストを中心に授業を展開して、自分自身が学ばないといけないわけですから、何回か繰り返しているうちに、だんだんわかってくる。そこに補足的に関連資料を提供したり、実践事例をいろいろ見聞きして、図書館を担当しているときに内部の司書の皆さんにもお世話になりましたし、近隣の学校で先進的によくやっておられる学校がたくさんありましたので、関西でね、そういうところからいろいろ教えていただいた、そういう自分で見聞した

事例をできるだけたくさん紹介する。それから調査課題の提示。これは後で話します。

テキストの内容を精査しながら授業をやっているうちに、やはり自分なりのカリキュラムを組み立てたいという願望が出てきて、さらにこういった論点をつけ加えたらいいのではないかと、とか、このところはちょっと扱いにくいから軽くしておこうかと、例えば、このテキストでは「学校図書館の会計」というのが一つの章として立てられているわけですけど、現実問題として、各学校での図書館の会計というのは、さまざまで、私学と公立でも違いますし、そこだけ一つの章というのは、私自身は扱いかねた、ということがあって、講習の場合だったら、先生方が受講に来られているので、学校現場の様子を聞きながら、どういう会計処理をしていくのがいいのかということをお互いに話し合っていたかたちで軽く触れる程度にしました。それから、評価にルブリックを取り入れる、というようなことを追加していった、最終的に、このように再構成してしまったわけです。

講習内容

- | | |
|--|--|
| 1. 学校教育と学校図書館 <ul style="list-style-type: none">・ 今日のエデュケーションと学校図書館・ 「学校図書館」の変遷・ 教育課程と学校図書館・ 学校図書館法と関連法規 | 3. 学習者の多様性と学校図書館 <ul style="list-style-type: none">・ 特別支援教育・ 多文化教育・ 学習スタイル、多面的知能など |
| 2. 学校図書館の実務 <ul style="list-style-type: none">・ 学校図書館のメディア・ 学校図書館の活動・ 学校図書館の環境整備（人と環境との関わりを中心に） | 4. 学校図書館の経営 <ul style="list-style-type: none">・ 学校図書館の組織と職員・ 学校図書館ネットワークの構築・ 学校図書館の経営活動・ 学校図書館の評価と改善・ 学校図書館の課題と展望 |

これはシラバスではないので、1回1回の授業で取り上げる項目を表しているわけではありません。ポイントを四つに整理して、講習を念頭に入れてこういった構成にしました。

この中で特徴的なのは3番なのですよ。特別支援教育と学校図書館というところをどうしても入れたかったのです。今でこそいろいろ資料が公開されていますけれども、2000年代のはじめの頃はそういう資料がなかったのですけれども、いろいろ集めまして、

実践事例も聞きながら入れていきました。そこから先なのですよ。「学習者の多様性と学校図書館」は特別支援教育だけに限定するのではなくて、多文化教育も含める。外国の子女が日本の学校に入ってくることが多くなってきています。ある地域では、一クラスにかなり多くの外国籍の子どもが入ってきているという事例も聞くので、このことをおろそかにしてはいけないだろうと思って入れてみました。だけど、学校図書館での実践があるかということ、見当たらないのですよね。学習スタイルとか多面的知能、あるいは多重知能とも言いますよね。学習者の多様性というなら、ここまで取り上げなくてはいけないだろうということで、これに対応して学校図書館の実践がどのように行われているのか、というのは、私は全然わからないし、探しても見つからないわけですけども、こういう視点でも考えていったらど

うか、こういう視点に立ったときに学校図書館のサービスや教育はどういったものになるのか、一緒に考えてみましょう。

一方的に教える授業は学校図書館の授業ですからやらないわけですが、テーマやきっかけ、話題を提供して、皆で実際にどうやっていったらいいのかを考えていく、講習の場合、現職の先生が多いということで、実際に図書館と関わらなくても何らかの形で切実な問題意識をもっておられる方が多かったので、結構盛りあがりました。

学習スタイルについては、調べてみると、学力とは直接関係ないという研究結果もあるみたいですけれども、それでもやっぱり慣れ親しんだ学習法、例えば視覚型であるか聴覚型であるか、とか、朝型なのか、夜型なのか、慣れ親しんだ学習スタイルを急に変えるとなると違和感があったり、抵抗があったりするもので、そういうものを尊重して例えばどういうふうに対応し、資料の提供をしていくのか考えましょう、ということをやりました。

こういうふうに再構成はしたものの、やはり細かい部分については、この古賀先生のテキストに依存して進めていった。

授業方法

- 情報提供
 - 解説, 資料配布, ビデオ (CD), 参考図書や調査課題の提示など
- グループ・ディスカッションと発表
- 心がけたこと
 - 受講者の意識や理解に応じた導入と励まし
 - 具体的な実践事例の紹介
 - 適切な探究課題の提示とサポート
 - 受講者との相互のフィードバック (振り返りシートの活用)

授業の方法はものすごくシンプルです。もちろん解説もしますし、いろんな資料も、ビデオもありとあらゆるもの、いろんな課題も出します。調査課題については、学部の学生に関しては、次の授業までに1週間あるので、その間にこういうことを調べてこういうレポートを書いてきなさいと言えるわけですが、夏の講習の場合は、毎日朝の9時頃から5時頃までやるわけですからね。先生方に、あくる日までに、というようなことはちょっと過酷です。それだけでなく

とも講習の途中で電話がかかってきて、校務で明日出席できませんという、せっかく2日目、3日目まで受講したのに、そのあと出席できないで資格が取れないということがあるので、できるだけ講習の時間内でカバーする、あるいは事前調査課題を提出してもらいました。つまり講習を申し込んだ先生方に対して、いくつかの視点を与えて、自分のところの学校図書館についての概要の報告をしてもらう、あるいはそれについてのコメントや分析を予めしておいていただいて、それを持ち寄ってディスカッションの素材にするというようなこともやったりします。

振り返りシート

- ・ 記述内容
 - 今日の授業で学んだこと、考えたことを自由に書いてください
 - 質問、意見、感想など
- ・ 振り返りに対するフィードバック
 - 事実や認識の誤りを訂正
 - さらに詳しい解説
 - 多様な回答の紹介とコメント
- ・ おもに学生の記述に対する助言
 - 教わったことを「自分がどう理解したか」を書く
 - 教わった「事実や素材をもとにして考える」

心がけたことはいろいろあるわけですが、その中で、特に最後の振り返りシートっていう、これは非常に単純なことで皆さんもおそらく授業の最後に一日を振り返って何か書かせておられると思いますけれども、私はこれにかなり力を入れたつもりです。記述内容は非常に単純です。「今日の授業で学んだこと考えたことを自由に書いてください」という欄と「質問、意見、感想など」という二つの欄を設ける。講習の場合はB4一枚を提出してもらいます。学

部の場合はA4一枚です。それで振り返りシートに対するフィードバックを丁寧にする。学校の先生はB4用紙にびっしり、裏まで書いてくださる人がいます。私は自宅から講習のところまで電車で2時間ぐらいかかりますので、明石から石山まで一関西の人じゃないとわからないですけどーそれに乗りながら、受講者が多いときで40数人ぐらだったのだけれども、出してもらったものを帰りの電車の中で全部チェックして、あくる日に必ずコメントする。一日の時間配分はあとでお見せしますが、ここは僕のしゃべったことを誤解しているのじゃないか、認識が違っているのじゃないかと思われるところに、とりあえず赤を入れておいて、あくる日にもう一度説明をする。さらに、こういうことを考えているのだったら、こういう資料を、私自身、図書館に行く時間ありませんのでネットで探すぐらいしかないので、補充資料を集めて、あくる日に説明するというようにしていました。これをずっと、2002年から2013年まで続けていました。

学部生の場合は、皆さんも実感しているかもしれませんが、なかなか書けないのですよね。まず「僕が教えたことは、君たちが学んだことじゃないよ」という、そこから言わないといけないのです。つまり教わったことを書くのですよ。極端な場合は項目の羅列です。〇〇について△△について学んだ、ということを書くので「学んでないだろう、それは僕が教えたことだろう」と厳しく指摘します。だから、教わったことをどう理解したかを書かなくてはいけないよ、ということですね。最初からかなりできている学生もいるのですけどね。それから、これもよくありますよね。「考えたことと感想とは違う」ということも徹底的に繰り返します。コメントをつけて必ず返します。で、次に出てきたときに、そういうのがどこまで修正されているか、学部の学生の場合は10数回やり取りするわけですから、そのやり取りの中で、改善されてきた学生は成績がいいということに当然なるわけですね。

事実や素材を基にして考える。ただ単に考えたことを書けというと、どこからこんな考えが出てきたのか、突拍子もないことを書き出す学生もいたりしてね。その一方で、連想とか想像、自由な発想というものも奨励します。僕がしゃべったことから、こちらが思いもしなかったような発想で書いてくる学生がいるわけですね。脈絡のわからないのは問いただしますが、脈絡のある、なるほどこう来たか、というね。そういう場合は、それを皆に公表してコメントする。そうすると、だいたい、ああ先生の求めているのはこういうことだなということがわかってくる。それでもなかなか書けない学生はいますが、書ける学生も増えてきたかなあと思います。

学部授業と一般の講習との違い

- 経験や予備知識、社会人としての成熟度などの違い
 - 学部生でも2回生と4回生では、科目に対する意識や理解度が大きく異なる
 - 受講者の実態に応じて指導項目や授業方法などを変える
- 4日間の短期集中型の授業と15回に分割された授業
 - 集中型の講習では、短期間に多くの情報量を提供するには無理がある。
 - 集中型の講習では、予習、復習（振り返り）、課題など、授業外での学習に時間をかけて熟考を促すことができない

これも言い出したらキリがないのですが、講習と学部の授業と両方をしていて痛感するのは、やはり経験や予備知識、あるいは教職に就いていなくても社会的な経験のある人と学生とはずいぶん違うなということ。学生の場合とはとにかく一から話さなくてはならない。学校にもよるというと語弊があるかもしれませんが、私の場合はそれを痛感しています。

同じ学部生でも司書教諭科目は2回生から取れるのですよね。2回生と4回生でも

全然違う。教職科目を4回生はほとんど取っているでしょ。学年をまたいでグループを組んでお互いに学び合うと、2回生で気が付く学生もいますが、なかなかピンとこない学生もいて、そういうところが難しいと思います。

講習の方は4日間の短期集中型ですけども、同じ教員の同僚としての感覚で接することができるので、私自身は非常に楽しい、実際に効果があったかどうかは別ですよ、自己満足と言われればそれまでなのですけども、やりがいを感じることができました。

一般の講習での授業展開の工夫

- 現職教員、社会人としての経験や予備知識を利用する
 - 項目を精選し、詳細は参考資料として提供する
 - 話し合いによる共有によって、理解を促進をはかる
- 講習における一日の時間配分
 - 午前中の前半は、前日の「振り返り」に対するフィードバックと発展的な解説をおこなう
 - 後半は、新たな項目の解説をおこなう
 - 午後は、ビデオ視聴、調査課題、各種資料やテーマについてグループ・ディスカッションと発表をおこなう
 - 最後の30分は「振り返り」にあてる

講習では、現職教員、社会人としての経験や予備知識をフルに活用するので、わかりきっていることを重ねて説明することはない、そこから話が進展させられる。難しかったのは、一日朝早くから夕方までの時間配分をどうするかということです。学部生の場合は90分で授業やって一週間、教わったことを寝かせることができる。考えさせることができるわけですよね。思考が熟成するというかね、そういう時間が取れるのだけれども、講習はそうはいかないの

ですよね。だから、あんまりたくさんを一日のうちに詰め込むことはできない。実際に教えられる項目は限りがある。その分だけ、これは後で資料を読んでおいてくださいね、とか、これは絶対必要だから現場に戻ったときに参照してくださいね、というようなことを言いながらやるのです。

一日の時間配分は、午前中の前半は振り返りに充てる。これは単なる振り返りじゃなくて、ここで私は学んでほしい、つまりこっちをメインにしているわけです。前日に話したことは導入に過ぎない、私の感覚としてはね。振り返りでは、本気で具体的な現場の実情を書いてくださる人もあって、ああそれは大変ですね、そういう場合は例えばこんなことも考えられる、というような、相談に対応しているようなところもあって、私の場合はこういうふうに対応しましたよ、という話ができたわけです。

午前中の後半、お昼休みの前に新しい知識的なことの説明をして、午後はビデオの視聴とか、グループワークですね、グループディスカッションと発表をして、最後の30分は振り返りに充てるのですけれども、時間をオーバーする人がいるのです。5時に終わるところが5時半頃になる場合もある、最後の一人になるまでいっぱい書く人がいるので。そういう人

のためにも、やっぱりあくる日はフィードバックをしておいてあげなくてはいけないかなあ、という対応をしていたのが、私のやり方でした。

講習を実践に活かすための課題

- 理想と現実のギャップをどう埋めるか
 - 学校の実情をふまえて、利用可能な資源を活用し、新たな学校図書館のヴィジョンを形成し、実行する力を涵養する
- 学校教育において欠くことのできない基礎的な設備
 - 学校の情報基盤としての学校図書館
 - 教職員の学びの場としての学校図書館
- 教職員間の協同の促進
 - cooperation, coordination, collaboration

時間オーバーしていますけれども、最後に「講習を実践に活かすための課題」と書いています。テキストの著者と出版者がおられて非常に申しにくいですが、テキストの性格上、一般化したモデル的な形で書いておられるわけですね。それを、こうあるべき、と捉えてしまうと、なかなか実現できない。つまり理想と現実のギャップが大きい。特に学校図書館の場合は、あまりにも大きい。講習で学んだことを職場で活かすのがむずかしい。新たな気づきが

あったときに、この9月から現場で取り入れましょう、といっても簡単にできる状況にはない。

私は滋賀大学でやっていましたけれども、滋賀県というのは京都の近くで、人口流入が激しいのですよね。どんどんベッドタウン化して行って、学校の生徒がどんどん多くなっていく、教室がない、図書室のスペースが削られる。特別支援学校の場合も生徒が増えてきて図書のスペースがどんどん減らされていく。そういう学校の実情というものがあるわけですね。教員の多忙化、深刻な問題を抱えている子どもたちもいる。そういう中でどうやって学校教育をやっていくかっていうこと自体が問題なのですけれども、そこで学校図書館がどんな役割を果たせるか。まず実情を踏まえることが大前提ですけれども、現実を直視しながら、今、ここで利用可能な資源を活用しないとだめなのですよね。こういうものが足りないからと予算を請求することも、もちろん大切なのですけれども、今、どんな資源が利用できるか、視野を広くしたら案外見つかる場合があったりするわけですね。そういう工夫が必要だし、利用可能な資源を見つけて活用し、なおかつ「新たな学校図書館のヴィジョンを形成し、実行する力を涵養する」と書きましたが、これは大変なことにちがいないのですけれども、これからの課題かなと思います。

それからもう一つ、学校図書館は「学校教育において欠くことのできない基礎的な設備」と法律には書いてあるわけですが、はたして本当にそうなの？という質問なのです。あった方がいい、あることによってよりよい教育ができるっていうのは、欠くことのできない、とはちょっとニュアンスが違いますよね。これは、僕は大きな問題ではないかと思います。講習のときにも、法律にはこう書いてあるけれども、あなたの学校の図書館はどうですか、「欠くことのできない基礎的な設備」ってどういうことなのかを考えましょう。なかなか答えは出ないけれども、それを考え続けるように皆さんを促しています。

私自身は、これは理想論ですが、「学校の情報基盤としての学校図書館」というふうに書きました。読書欲求をもっている子どもをどう掘り起こしていくか、とか、授業でどういうふうに使うかというようなことがあって、手が回らないといえばそうなのです。だけど、もっと広い範囲、学校の情報基盤といった場合には、学校の教育活動すべてに関わって図書館が役立っているかという問い直しをして、そういう存在にしていこうためにはどうするかっていうことを、かなり長期的な展望をもって考える必要がある。現実の問題として、先生方は図書館が利用できなくて困っていますかというアンケートをとっても、困っているという人は

たぶん少ないだろうと思いますが、そこを困っていると言わせないとダメなのですよ、本当はね。

それからもう一つの役割として「教職員の学びの場としての学校図書館」と書きましたけれど、これは柔らかに書いたのです。つまり、これは、何が言いたいかというと、学校教育のあり方を問い直す、学校教育に対する批判的な視点を提供する、つまり先生方が学校図書館に関わることによって、ああそうか、自分たちの教育にはこういうところが足りなかったのではないかということを反省というか、省察というか、ああなるほどな、こうすればよかったのだという気づきを高めるような存在になればいいということです。つまり教室の教科書を中心とした授業と、学校図書館で行われる教育というものを一つの学校に存在させることによって、それが可能になるのではないかと。今までは先生方の授業をどうサポートするか、先生方の授業は絶対なものであって、それを支援することによって図書館を使ってもらいましょう。それはもちろん重要なのですが、それと共に先生方に、自分たちがこういう教育をやっているとはいけない、ということに気づかせるような図書館であるためには、何が必要か。

「教職員間の協同の促進」と書きましたが、よく言われているけれども本当の意味で協同というのはなかなか行われにくい。チーム・ティーチングも、なかなか実現しにくい。兼務の司書教諭がチーム・ティーチングやるっていてもこれは大変なことになりますからね、実際にやっている学校もあることはあるのですよね。ただかなりの労力を割いてやっておられるという現実もあるので、ここのところをどうするかということも問題になるのではないかと思います。

当初からここまでお話しするつもりだったので、あとのスライドは皆さんのところに資料として入れてあります。「独自に取り入れている項目など」というのは、自分なりに考えて入れた部分なので、参考までに、ご覧になっておいてください。

[最初のスライド「今日の教育課題と学校図書館」と、その次の「アメリカの学校図書館」は、いずれも講習内容1「学校教育と学校図書館」で扱った項目だが、いま改訂するとすれば前者に「子どもの貧困と学力格差」を加える必要があるだろう。その次の3枚のスライド〈アメニティからアフォーダンスへ〉〈知能環境論〉〈知のアフォーダンス〉は、講習内容2「学校図書館の実務」の「学校図書館の環境整備」で扱った項目である。続く「学習者の多様性と学校図書館」は講習内容3で、残る二枚は、講習内容4「学校図書館の経営」で扱った。これらを取り入れた意図と具体的内容の説明は別の機会にゆずる。]

<div data-bbox="284 1751 746 1832" data-label="Section-Header"> <h3>独自に取り入れている項目など</h3> </div>	<div data-bbox="965 1585 1292 1617" data-label="Section-Header"> <h4>今日の教育課題と学校図書館</h4> </div> <ul style="list-style-type: none"> • 学校と社会（公教育の場としての学校の使命） • 「学力」とは何か <ul style="list-style-type: none"> – 学力低下論、PISA、ACT21Sなど • 子どもの現実と学びの弱体化 <ul style="list-style-type: none"> – 希薄な人間関係、自尊感情の欠如、意欲の欠如など – 子どもの生活実態（家庭での学習、読書、貧困） • 学校教育をとらえる視点 <ul style="list-style-type: none"> – 家庭、学校、地域社会、それぞれの教育力の活性化と連携 – 生涯学習を視野に入れる

アメリカの学校図書館

- ・「学校図書館」という概念の誕生
 - ジョン・デューイ『学校と社会』
- ・アメリカの学校図書館基準(1920~1975)
- ・『インフォメーション・パワー』(1988&1998)
- ・NCLB法と学校図書館
- ・学校図書館タスクフォース(2006)
- ・オバマ政権下の教育改革と学校図書館

〈アメニティからアフォーダンスへ〉

- ・アフォーダンスとは
 - 自然が提供する不変のもの、それらの可能性や機会のすべてをアフォーダンスと呼ぶ(ジェームス・ギブソン『生態学的視覚論』サイエンス社、1985)
 - アフォーダンスとは、環境が動物に提供する「価値」のことである。アフォーダンスとは良いものであれ、悪いものであれ、環境が動物に与えるために備えているものである。(佐々木正人『アフォーダンス—新しい認知の理論』岩波書店、1994)
 - アフォーダンスは事物の物理的な性質ではない。それは「動物にとっての環境の性質」である。アフォーダンスは知覚者の主観が構成するものでもない。それは環境の中に実在する、知覚者にとって価値のある情報である。(同上)

〈知能環境論〉

『知能環境論』半戸智久、NTT出版、1996

- ・環境のあり方そのものが、知能の姿
 - 知能の成長にとっては環境の変化、成長が必須のこととなる。したがって、たとえ環境を構成する要素の数が少なくても、それが常に新しいものに变化しているならば、知能の制約は解かれた状態にあることになる。
- ・知能環境としての図書館
 - 多様な気づきと活動を誘う図書館
 - 「知のアフォーダンス」
- ・参考図書『構想力と想像力』(半田智久、ひつじ書房、2013)

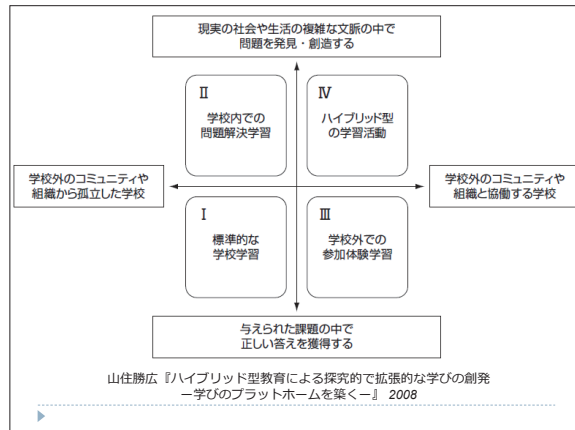
〈知のアフォーダンス〉

『知能環境論』(半戸智久、NTT出版、1996)

- ・外在知がそれと出会う人の内在知との関係において取りうる意味と価値、すなわちその個体にとっての知識の可能性
- ・学習者にとって豊かで理想的な知のアフォーダンスとは、個々の学習者が必要としているものが常に十分に広く自由に解放されていて、そこでの活動に心地よい刺激と触発を受け、そこから先に知的な冒険をしてゆこうと動機づけられること、そしてそのときそれに応じられる環境があることである

学習者の多様性と学校図書館

- ・特別支援教育における学校図書館
 - 特殊教育から特別支援教育へ、ノーマライゼーション、発達障害、DAISY
- ・多文化社会における学校図書館
 - 多文化教育の動向、IFLA多文化図書館宣言、結び目の会
- ・学習スタイル、多元的知能と学校図書館
 - 学習者の多様性に対応する学校図書館
- ・学校教育システムの国際比較
 - 多様性に応じた教育保障の観点から



ホリスティックな組織づくり (菊地栄治)

1. 望ましい生徒像にもとづく組織目標
vs. 「生徒の現実(切実さ)」からの出発
2. 「優秀で均質な生徒」のかき集め
vs. 「生徒のエンパワメント」の実践
3. 少数の教職員層による目標設定
vs. コンセプトを共有するプロセス
4. 他人任せの改革 vs. 一人ひとりが試みる改革
5. 一元的な教育社会のための持続不可能な改革
vs. 公共圏をつくっていく持続可能な改革
6. (他者を通して) 自己変容しない教育
vs. 自己(相互)変容する改革

菊池栄治『希望をつむぐ高校 - 生徒の現実と向き合う学校改革』岩波書店、2012

中村百合子「立教大学の「学校経営と学校図書館」」の教育実践

立教大学の 「学校経営と学校図書館」

立教大学
中村百合子

本日のお話の流れ

- ・私の教員歴
- ・立教大学のカリキュラムと履修モデル
- ・「学校経営と学校図書館」の履修者
- ・授業の基本方針
- ・授業の目標と計画-2015年度の例
- ・教科書
- ・リーディング課題
- ・過去10年の実践から学んで

では私、これから立教における「学校経営と学校図書館」についてお話ししたいと思います。
最初に私の授業を作っている背景となる私の教員歴についてお話ししたいと思います。司書教諭の資格について、立教大学は独自のカリキュラム編成をしていますので、それについてご説明したいと思います。そのうえで私の授業に来る履修者についてお話しします。そして授業の内容や方法の話に入る前に、私の授業の基本方針をお話ししたいと思います。これは授業のやり方や教育方法も含んでいます。それから今年度どういうふうに授業をやったかという例をお示しして、教科書やリーディング課題のあり方について、どんなものであったかをお話ししたいと思います。今いろいろ試行錯誤…じゃないな、10年を過ぎて考えていることをちょっと整理して終わります。

私の教員歴

- ・専任教員になって約10年。その前に数年、非常勤講師がけもち
- ・前任校での経験(2004年10月～2011年3月)
 - 文学部の改組により社会学部で専任として採用。司書課程・司書教諭課程の非常勤講師の採用人事も学部、学部で審査
 - 司書課程・司書教諭課程の科目の登録は自由。各学部の規則によって、修得した単位が卒業単位として認められるかが決まっていた。ちなみに、「学校経営と学校図書館」にある科目は「学校教育図書館」と言い、この科目は教育文化学科の選択必修科目であった。
 - 司書課程・司書教諭課程の運営は学部所属の図書館情報学を専門とする専任教員2名が担当(学部の仕事と兼務)し、運営そのものは教務事務職員との密接な連携のもとで、課程としてかなり独立した判断が認められていると感じられた。
- ・立教大学(2011年4月～)と前任校の違い
 - 学校・社会教育講座の教員として採用(大学院は文学研究科所属)。司書課程(図書館司書コース・学校図書館司書教諭コース)の兼任講師の採用人事はこの講座内で審査のうえ、学校・社会教育講座委員会(学部長等が出席)で審査
 - 司書課程の科目は、履修の登録をし、登録料を払った者のみができる。卒業単位にはならない。よって、履修生は過去5年間で一番多くて30名
 - 司書課程の運営は図書館情報学を専門とする学校・社会教育講座所属の専任1名と特任教授1名で行なう。課程の運営は、教務職員のほか、学校・社会教育講座他課程や講座専任人事の判断を行なう総長室等にも相談して行なう。とはいえ、専任教員の判断は尊重されていると感じている。

私の教員歴なのですが、細かに書いたのですが、よかったら読んでいただくと。一見愚痴のように見えなくもないようですが、理解していただきたいことがいくつかあるのです。今、私は専任になってから10年ほどになるのですが、前任校、皆さん私がどこにいたか知っている人も多いと思うのですが、こちらの大学では私は社会学部の教員だったわけですね。今、私は学校・社会教育講座というところの教員でありまして、これは大きく、私の実感で

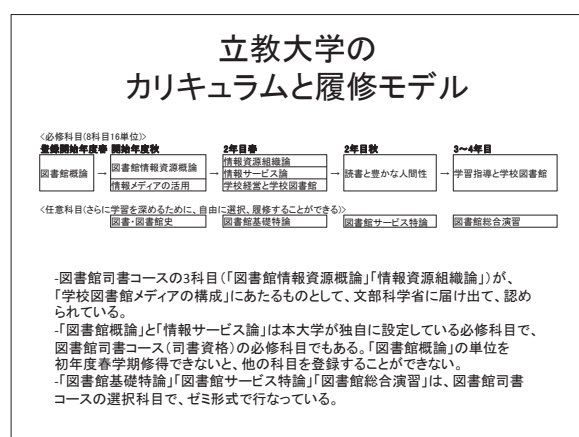
は違うのですよね。前の大学にいた時は、学部で人事が行われて、非常勤講師を採用するにも学部の教授会を通す必要がありました。で、今、私は学校・社会教育講座というところには教職課程と学芸員課程と社会教育主事の課程が入っているのですが、それらの教員だけがその中にいますので、人事等をやる場合、そこを通せばいいわけですね。そこには何の違いもないように思われるかもしれませんが、結構、大きな違いがあります。

学部の教授会を通すというのは、学部の他の先生たちがよし、と思うだけの人を連れてこなければいけないわけですね。ですから前の大学の時は、いつも、正直に申しますと、自分のことも含めて身の縮むような思いをしょっちゅうしました。そして今、学校・社会教育講座の中では、実践経験を非常に理解してくれるわけですね、教職課程と学芸員課程と社会

教育主事課程と似たような状況にありますので、理解してくれるということがあって、人事を通すのに説明しやすいですね。でも一方でその次の段階で学部長が出てくる会議に全部通します。そうしますと各学部での標準的な人事のレベルっていうのがもちろんあるわけじゃないですか。それを皆、背景にもってその会議に来ますので、それと、私どもの司書課程が出す人事がどのようなレベルで行われているかというのは…。それは今、私が頼んでいる先生方がどうこうということではなくて、本当に図書館[界]全体の問題なのだけれども、そのことがあります、一つは。ですから人事の問題があって、要するに私は前、学部のところにいたし、今も学部長たちに人事を通さなければいけない立場にあって、自分を含めて司書課程の授業の質というものに対して非常に厳しい気持ちをもっているということです。責任を取らなくてはいけないと本気で思っているの、だから生半可な授業を、自分が主任をしている課程でしてほしくない、というふうに、まあ、私自身もできない、と思っているわけですね。で、実際にできているかどうか今日お話ししますので、まあ、“恥の多い生涯を送ってきました”じゃないですけど、いろいろ試行錯誤もしてきて今があるわけなのだけれど、ではそれは学部長が見て納得するレベルの授業かどうかで、また議論がいくらでもできると。

もう一つ重要なことは、前の大学では私の授業は学部の中にありまして、教育文化学科というところの選択必修科目だったのですね。卒業単位にももちろん数えられていましたし、全学的にも、“学部の自治”で、学部の教授会が私の科目を卒業単位として認めるのでいいとふに決めてれば、私の科目が卒業単位になりました。今、立教大学では、司書資格や司書教諭資格をとるための科目は卒業単位にはなりません。ですから大学の学部で行われている単位と同じように私どもが見られているか扱われているかというのは、ちょっと疑問がもしかしたらあるかもしれないですね。

でもそのおかげで立教大学の司書資格や、司書教諭資格のコースを履修している学生は、単位を目的に来ていませんので、もちろん資格が欲しいと思って目的意識はありますけれども、卒業のための単位を集めている、みたいな感覚では決して授業に出てきていませんので。そして人数も少ないので、私がどういう授業をするつもりがあって、何を伝えたいかをはっきりさせておけば、彼らとのある種の師弟関係を非常に結びやすい関係にあると思います。前の大学は非常に大きい教室の中で、学部の中のこの時間が空いているから、とにかく単位を集めにきた、という学生がいなかったから、今の大学のほうがそういう意味では関係を結びやすいようなところがあります。背景があるということですね。



立教大学のカリキュラムと履修モデルというのを見ていただきますと、私どもは5科目10単位ではなくて、8科目16単位を指定しています。ただし先ほど(「司書教諭の戦後史」で)も申しましたように、司書教諭の資格というのは司書教諭講習の修了をもって資格証明書が出ますので、実は立教カリキュラムはこうなっているけれども、本来的にはこうなっていますという、「図書館概論」と「情報サービス論」は、仮に単位を落としていても、司書教諭資格は取

れちゃうわけですね。個人申請すればいいのですよ、東京学芸大へ。

なのだけれど、立教の恐ろしい仕組みは、「図書館概論」を落とすと先に行けないという

ことになっていますので、「図書館概論」を一番最初に、司書課程の図書館司書コースといって司書資格をとる人たちと一緒に私の授業ですが受けて、それを通らないと先に進めません。ですから、端的にいうと、「情報サービス論」だけは落としたとしても、最終的に個人申請で司書教諭資格が取れる、というふうになっています。そして、「学校図書館メディアの構成」は立教では開講していない。その代わりに「図書館情報資源概論」と「情報資源組織論」を取ればいいと、この2科目は司書資格と一方向の読み替えになっているわけですね。この仕組みは私が作ったのではなくて、私は2011年にこの大学に来たのですけれども、その前までに前任者の先生が作ってあったものに、基本的に準じて作ったもので、来たばかりでしたから、2012年度からのカリキュラムには大きく違いをつけなかったわけですね。

「学校経営と学校図書館」の履修生

- ・ 年平均15名
 - 2011年度17名; 2012年度30名; 2013年度10名; 2014年度7名; 2015年度11名
- ・ 日本文学専修の学生が多いが、全学部履修生はおり、大学院生もいる。
- ・ 教職課程もしくは、教育学科の初等教育専攻と並行して、学校図書館司書教諭コースを登録。登録料は15,000円
- ・ 一方、図書館司書コースとが学校図書館司書教諭コースを並行履修している学生は少ない(年に1人いるかいらないか)。
- ・ 小学校教員は実際に就職している印象がある。司書教諭として採用された者は、2011年以降には1名
 - 私立の中高一貫の女子校。大学院修士課程の修了生。司書資格と司書教諭資格の両方をもつ。
- ・ 学校図書館司書教諭コースの履修生は概してまじめであり、優秀な学生と思われる。コミュニケーション能力もある。

「学校経営と学校図書館」の履修生ですが、恵まれているのだと思いますが、15名ぐらいです、毎年。文学部文学科日本文学専修の学生が多いのですけれども、院生もいます。教職課程もしくは、教育学科の初等教育専攻と並行して、このクラスにいます。登録料を別に払う必要があって、15,000円です。一方で、図書館司書コースつまり司書資格のコースと司書教諭資格のコースを並行履修している学生は1年に1人いるかいらないかです。すごいタフでとても無理なの

だと思う。小学校教員は実際に就職していているという印象があります。立教は教育学科の小学校教員の養成は上手く就職させているのじゃないでしょうか。で、私が教えるようになってから、専任の正規職の司書教諭に就職したのは一人だけ。大学院の修了生で、司書資格も司書教諭資格ももっていた方がキリスト教系の中高一貫校の女子校に司書教諭として就職しています。なかなかレアなケースだと思いますが。学生は基本的にまじめだし、非常に優秀だと手前味噌ですが思いますし、図書館司書コースのほうはびっくりするくらいコミュニケーション能力のない人が年に何人かいますが、司書教諭コースのほうにはいないです、やっぱり教師になりたいというのが前提としてあると思いますので、あんまり会いません。

授業の基本方針1)

- ・ 単位の実質化を目指し、単位計算の基準を厳格に考える。
 - 学校図書館法第4条
 ・ 前条に規定する単位の計算方法は、大学設置基準(昭和31年文部省令第28号)第21条第2項に定める基準によるものとする。
 → 履修の心構えとして、次のことを初回授業で告知
 「授業への参加の原則として、授業に出席し、配布資料をもらうだけで満足しないこと。そういう学習態度で授業の目標が達成でき、司書教諭資格取得の単位を修得できる授業ではない。仮に授業外の予習復習や授業のための準備に、毎週4時間かかってもおかしいと思わないでください。これは大学設置基準の規定から計算される自習時間の標準であり、過剰な学習が求められているというわけではありません。」
- ・ 学生が主体的に学ぶよう教育方法を工夫
 - 事前リーディング課題→授業時にリアクションペーパーを執筆→4名程度のグループで回覧、ディスカッション
 - グループワーク
 - 講師の話は毎回1/3(30分)程度、長くても半分。極めてシンプルなレジュメと教科書、板書で行なう。

授業の方針ですが、私は厳しく最初に言っていますのは、単位の実質化を目指しているということと、先ほどみたいな学内事情のような話はしないけど、学生には、私は他の学部の授業を受けたときと同じぐらいの手ごたえを感じて学生が単位を取ってほしいと思っているということを、最初に伝えているつもりです。

その時に言いますのは、「授業への参加の原則として、授業に出席し、配布資料をもらうだけで満足」するなど。これ、第1回

の授業の時に読み上げて、「そういう学習態度で授業の目標が達成でき、司書教諭資格取得の単位を修得できる授業ではない。仮に授業外の予習や復習や授業のための準備に、毎週4

時間かかってもおかしいと思わないでください。これは大学設置基準の規定から計算される自習時間の標準であり、過剰な学習を求めているというわけではありません」というふうに初回の授業で言います。ま、それでも「学生は」消えないですよ。そんなに本当は厳しくないだろうと最初は思ってるのだと思うのですが、実際厳しいわけなのですが（笑）。

授業の基本方針2)

- ・ 成績評価の方法は、教育方法を反映して決定
 - － 授業への出席と積極的参加（20%）← 学生の発言や態度、ファイリングチェック
 - － リーディング課題（30%）← リアクションペーパー
 - － グループ発表（30%）← グループワーク
 - － 最終テスト（30%）← 持ち込み不可、重要事項の暗記の確認25%、小さな論述問題25%、大きな論述問題50%で構成
- ・ 最終テストは最終回のひとつ前の授業時に90分かけて実施
最終回でコピーしたものを返却し、答え合わせ、講評を行なう。
 - － 論述問題については、最高得点をつけた回答を名前は消してコピーして配布し、講評を行なう。
 - － 得点の分散をグラフ化して示す。
 - － 採点の基準を箇条書きで示す。
 - － 採点はひとつの問題については同じ日に終える（プレを避ける）。

授業の教育方法を工夫していきまして、事前に、あとで説明しますリーディング課題というのを読ませています。そのあとにリアクションペーパーというのを執筆させているのですが、それはこの大きさの紙で裏表なのですが、A4の半分より小さいですね。で、これを、なんと15分で私がその場でリーディング課題に関連するお題を出して書かせます。最初は下手すると5行ぐらいしか書けないのですが、そのうち裏まで書けるようになります。それは

最初に学生に「最初は書けないかもしれないけれど、やり方がわかってくれば書けるし、書けるようにならないといけないのだ」というふうに言っているもので、書けるようになります。

そのあと4～5人のグループを組ませて輪にならせて、自分の書いたものを回覧させます。で、ひととおり回ったところで、ディスカッションをします。ディスカッションのテーマは私が与えるのではなくて、学生たちが他の人のリアクションペーパーを読んで気になったことについて質問しなさいという形で質問をしたところからディスカッションさせます。それが一つ。重要な、毎週のようにやっていること。それから課題としてグループワークを入れているということ。

それから講師の話は毎回の授業90分のうち3分の1程度。長くても半分。でも、リアクションペーパーとディスカッションやって、それをまとめてたら、半分以上になってしまうことが多いので、30分にしようというふうに考えています。きわめてシンプルなレジュメと教科書と板書という形です。教科書については後で話します。

授業の成績評価は教育方法を反映して決定していきまして、一つは学生の発言や態度、ファイリングチェックの内容を、授業の出席と積極的参加という形で20%。ファイリングチェックというのは何かというと、今の学生—私の時代もそうだったか記憶にないのですが—彼らに配布資料を毎週、教科書の他に配るじゃないですか。そうすると彼らはこの「クリア」フォルダに突っ込むわけですね。で、先週、配ったあれを出しなさい、と言っても、それを引っ掻き回して、私の話が終わっているわけですよ。自分の資料が整理できないのに図書館の資料の整理ができるのでしょうかという話で、授業が真ん中ぐらいまで進んだところで全員のファイリングをチェックします。

ファイリングもさっきと同じで、4～5人ぐらいのグループを組ませて、隣の学生にファイルを回させて、誰ちゃんのファイリングはいい、見出しがついていたとか、シールつけているとか、いろいろあるわけですよ。彼らソニープラザとか行っているいろいろ整理してかわいくしてきたりするから。それも1回やり始めるとやみつきになりますので、ああ整理するって面白い、とか、他の人たちは違う整理の仕方をしている、とか、ノートはこういうふうにするという、とか、学習するのですよね。なので、ファイリングチェックを、「図書館概論」

と、この「学校経営と学校図書館」ではやっていて、[クリア]フォルダの中に紙に挟んでということは私以外の授業でも司書課程の授業ではしてはいけないと言っています。もう必ずファイルしろと。それが一つ。

もう一つはリーディング課題とリアクションペーパーのセット、もう一つはグループ発表させる、と最終テストということで、最終回の一つ前の授業の時に90分使って最終テストをしていまして、持ち込み完全不可で、重要事項の暗記と論述問題を2つ出しています。重要事項の暗記は事前に問題を言いません。が、小さな論述問題と大きな論述問題はその年の学生の顔を見ながら、うわ、これは、と思っている年にはヒントをあげたり、下手すると問題そのものを教えて、ただし持ち込み不可ですので、本人たちは事前に論述を少し書いてみて、覚えて夢中でやってくるという感じです。

テストは返却しています。ですから最終回の一つ前の授業の時に実施して、最終回の時にコピーしたものを返すと。で、論述問題は最高得点をつけた解答、複数を名前は消してコピーして配布して公表します。それと得点の分散をグラフ化してかつ採点の基準は簡条書きにして、採点は一つの問題については同じ日に終えたということで、ブレていないはずだということについては学生にはっきり伝えます。

授業の目標と計画-2015年の例

- ・ (目標) 教育、学校教育、学校経営といった観点から、学校図書館について理解し、各自が考える。そして、司書教諭の使命と仕事を総合的に理解する。
- ・ (授業計画)
 - 1 授業の概要説明
 - 2 学校図書館の施設・設備
 - 3 日本の学校図書館の法的根拠、現状
 - 4 学校図書館の歴史(米国)
 - 5 学校図書館の歴史(日本)
 - 6 学校図書館の使命・機能概説
 - 7 学校図書館の資料・情報提供活動
 - 8 学校図書館の教育活動
 - 9 学校図書館の職員体制と司書教諭の仕事
 - 10 グループ発表検討会1)
 - 11 グループ発表検討会2)
 - 12 グループ発表検討会3)
 - 13 最終テスト
 - 14 最終テストの復習、学校図書館の評価・改善、学校図書館研究概観、まとめ

授業の目標と計画は、目標は足立先生のを見たら足立先生のがいいから、来年から「ヴィジョンを形成する」とか、使おうかなと思っているのですけれども。私はシンプルに、教育、授業の計画はここに。学校教育、学校経営といった観点から、学校図書館について理解し、各自が考える。そして、自分で司書教諭の使命と仕事を総合的に理解できること、っていうふうになっています。

授業の計画は、ここに書いた通りなのですが、私の授業の計画の特徴は、施設設備

が第2回にあるのですね。これは第1回の授業の時に、どんなような学校図書館を経験したかという話を書かせたりディスカッションしたりするので、それを少し踏まえて、こんなものが理想だったと言われているのだけどという話をしながら、場所としての学校図書館の議論を経験と混ぜ合わせて考えてもらうような形で、最初に学校図書館のイメージを、本当にそれは施設・設備・場所の問題なのかというところを最初に考えてもらうところから掘り起こしています。

教科書

- ・ 2015年度までは、全国学校図書館協議会編『学校図書館・司書教諭講習資料第7版』同協議会、2012。これと別に、学校図書館の意義について考えさせるリーディング課題を配布
 - － リーディング課題を通して、学校図書館を理論的に考えさせる。
 - － グループワークを通して、学校の中にある図書館であるということについて考えを深めさせる。学校図書館における1)命や暴力についての資料の取り扱い; 2)漫画の取り扱い; 3)図書館資料の利用記録の教育活用について、グループに分かれ、事例をあげ、論点を整理して発表するというもの
- ・ 2016年度は、中村百合子、河野哲也著『学校経営と学校図書館』樹村房、2015を採用し、リーディング課題は配布しない予定
 - － 毎回、学生の中からコーディネータを事前に1名指名し、学生によるディスカッションで約60分を実施することとし、講義は変わらず30分程度を予定
 - － グループ発表を無くす。

教科書は全国学校図書館協議会の「司書教諭講習資料」という単なる資料集を毎年使って、それに加えてリーディング課題を配っていると。リーディング課題を通して学校図書館を理論的に考えさせようとしています。グループ発表は何かということ、学校の中にある図書館であるということについて考えを深めてもらうために、一つは命や暴力についての資料の取り扱い、これは『完全自殺マニュアル』に関連しているので

すけれども、それからもう一つは漫画の取り扱い、もう一つは利用記録の教育利用についてということでグループを分けて事例をあげて論点を整理して発表してもらってディスカッションする、というようなことをしています。

来年度からは私、今回、教科書（中村百合子編『学校経営と学校図書館』樹村房、2015.）を出しまして、廊下に1冊あるので、覗いていただければと思いますが、これは過去の私の授業のやり方を反映して作った教科書なので、どういう形になっているかっていうと、リーディング課題のようになっていて、読んできてもらってディスカッションできるような構造になっているはずです。

リーディング課題-2015年の例

- ・ 「2 学校図書館の施設・設備」の前に
 - － 最新の学校図書館調査結果（『学校図書館』誌に公開された「学校図書館調査」結果と、文科科学省の「学校図書館の現状に関する調査」結果）
- ・ 「3 日本の学校図書館の法的根拠、現状」の前に
 - － 石原素雄著『近代日本の学校文化誌』思想文閣出版、1992. から、目次部分と、「1 教具から見る学校文化」(p.4-34)
- ・ 「4 学校図書館の歴史（米国）」の前に
 - － M. デューイ著、毛利陽太郎訳『学校と社会』明治図書、1985. から、冒頭の p.1-7 と、「第3章 教育における浪費」(p.101-123、および第3章関連の注釈部分)
- ・ 「5 学校図書館の歴史（日本）」の前に
 - － 梅津郁夫『プラグマティズムの思想』筑摩書房、2006. から、目次部分と「まえがき」と、「第11章 デューイの「道徳主義」と教育論」(p.234-250)と「第12章 デューイと真理と宗教」(p.251-267)
- ・ 「6 学校図書館の使命・機能概説」の前に
 - － マイケル W. アップル著、野崎与志子ほか訳『オフィシャル・ノレッジ批判』東信堂、2007. から、目次部分と、「第3章 文化のポリティックスと教科書」(p.65-93)、および第3章関連の注釈部分
- ・ 「7 学校図書館の資料・情報提供活動」の前に
 - － 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会編『表現の自由と「図書館の自由」問題』2000. から、土居陽子『完全自殺マニュアル』の予約をめぐって、学校図書館における「図書館の自由」(p.112-125)と、『完全自殺マニュアル』中の刺激が少なめと思われる数ページ
- ・ この後は、事前リーディング課題は無しで、ファイリングチェック準備、グループ発表準備、最終テスト準備へ

部分ですね。それからその背景にある話としてプラグマティズムやデューイの思想について理解してもらうための資料を次の回に、そのあと「オフィシャル・ノレッジ批判」といって教科書というものを相対化することの重要性について考えてもらうための「文化のポリティックスと教科書」というものを。そして土居さんが書かれた『「完全自殺マニュアル」の予約をめぐって』というのを配ってます。

過去10年の実践から学んで

- ・ 立教に移って少人数授業が実現し、グループワークを新たに設け、さらにリーディング課題に対するディスカッションを設けた。それで、2013～2015年度はかなり授業進行が厳しくなっていた。学生もいっぱいはいっぱいだったように思う。
 - － しかし、近年に受講生たちから、学生同士のディスカッションは無くすべきではないという意見が寄せられた。
- ・ 来年度から、グループワークは無くして、学生主体のディスカッション中心として、新たな指導方法を試す予定。
 - － ただし、単なる「おしゃべり」ではない、深い学びを実現する「ディスカッション」をいかに実現するかについては注意が必要だと思われる。
- ・ 今度採用する教科書では、経営論が弱い、という指摘を足立先生からいただいている。これをどうすべきか。
 - － 「学校経営と学校図書館」については、科目名と、司書教諭養成科目のねらいと内容に示された「内容」の間に「ねじれ」があるという指摘もされている。（川瀬綾子、北克一）

ことを言ってきて。教授会の部屋で、リアクションペーパーを一所懸命、採点してたわけですよ。そうしたら「そんなの書かせて自分で採点してるのか」って言われて、自分が全部評価して自分が全部やる、教師と学生の関係1対1で作るっていうのに対して、なにか変じゃないか、新しいことやりたいと言ってるのに全然新しくないよ、とすごくはっきり言われたのですよ。それで、どうやってるのですか、って聞いて教えてもらったのが、リアクションペーパーを書かせたあとに、周りの人に採点させるっていうのをやってるって。そのあとディス

リーディング課題なのですからけれども、何かっていうと、1回目の授業が終わった時に来週までに読んできなさいと言って渡しているのは、学校図書館の調査の結果です。文科省と全国学校図書館協議会の。そこは現実の日本の学校の図書館の話であります。そのあとはわりと理論的な話に移ってきました、一つは『近代日本の学校文化誌』というところから「教具」というものについて考えさせています。もう一つは有名なデューイの学校図書館について書いてある

過去10年の実践から学んで何を考えているかということ。今、立教に移って、少人数授業というのが実現して、グループワークを新たに設け、リーディング課題に対するディスカッションを設けたという。昔、リーディング課題はリアクションペーパーを書かせて回収していただけたたのです。そうしたら、今度、教科書を一緒に作った、同僚というか先輩教員が「中村さんは新しい教育方法とか言ってるわりには一人でしゃべってるでしょ、授業で」みたいなこ

カッションしてる、それで授業は終わる(笑)、みたいな感じで。その時はそういう言い方だったのですが、そのあと授業を見せてもらったりしました。そんなこともあって、ディスカッションしなきゃダメだと思ったわけね。

実際、ディスカッションをさせたら学生たちは止まらないし。何度かディスカッションやめようかと思って、学生に去年あたり、「授業がパンパンで終わらないからディスカッションやめようかなと思って」と言ったら、「それだけは残してくれ」という学生が複数出てきて、ディスカッションは残すということで来年度からグループワークをやめるつもりです。

ただ、おしゃべりじゃない、深い学びっていうものに到達するようなディスカッションっていうのは、どうやったら実現できるのか。最初、リアクションペーパーを回覧して、はいディスカッションしなさい、って言って、毎年最初の何回かは何が起きるかっていうと、皆でにらみ合っただけのシーンとしているわけですよ。さっき友だちの書いたリアクションペーパーを読んでいるにもかかわらず、何の質問も出ないし、何のディスカッションの糸口もつかめないわけです。それを、やっぱりまずディスカッションするっていうことを慣れさせるだけでも結構、時間がかかりますので、そこを深い学びを実現するところまでどうやってもちあげるか、っていう問題は一つあると思います。で、これはディスカッションに関して言うと、私の授業のやり方に「図書館概論」を通して、慣れてくると、次の年「学校経営と学校図書館」に來ればだいたい大丈夫なのですが、同時進行で取っていたりする学生は、両方とも、方法に慣れるのに精一杯だなという印象ですね。

今度、教科書を私、書いたというところで、足立先生から一番最初に言われたのは、経営論が弱いという話で、これは非常に大きな課題だというのは前から認識していたのですが、「学校経営と学校図書館」という科目名ですね、これが結構ちょっと議論があるのですよね。北[克一]先生が¹⁾、学校経営っていう…今日、配りました「内容」²⁾っていうのを見ていただいてもですね、学校経営そのものっていうのは内容の項目のところにあがってないのですね、学校図書館経営という形ではあがっていますけど。ですから科目名と、もともと期待されている内容の間に「ねじれ」があるという指摘はあったわけで。私はこのねじれのところがどうも自分の中でずっとわからないところがあって。経営論のしかも具体的なところですね。デューイがどう言っていて、学校の中でどこに図書館が、とかそういう話ではなくて、もうちょっとプラクティカルな問題としての経営論の取り扱いっていうのは私の中で足りないなと思っているし、今日、足立先生のご発表を聞いて思ったのは、私は足立先生の授業の肝の一つであるところの、「学習者の多様性と学校図書館」という部分は今度の新しい教科書でも十分に取扱えてなくて、一緒に書いてくださった先生は障がい児教育の分野でも非常に有名な先生ですが、そのあたりをテキストの中で障がい児だけではなくて、多様性ということについては取り扱いできていないな、というふうに思っています。

では、だいたい時間がきているのですが、私と足立先生とのディスカッションというのは一問一答ずつぐらいでやりますか、それともフロアに行く…

(足立) 時間、お互いオーバーしているから…でもちょっといいですか？

一つはシラバスがどっかにあったね、「授業の目標と計画」、14回しかないというのと、最終テストというのをに入れておられる。僕の勤めていたところは15回、最終テストは15回から外せと言われていた。その辺はどうなのでしょう？

(中村) 立教は今のところ、第14回までで、かつテストも含んでいいという…で、テストに関して言うと、成績評価において40%を超えると、授業時間内では最終週でしかできなくなる。もしくは次の週の授業が終わった後のテストウィークにやるということになってい

ます。でも基本的に私のこの30%程度の授業であれば、13回でも12回でも1回でもどこでも。

(足立) これは他の学校はどうなんかなということを聞いてみたい。僕の場合、テストを15回の授業から除外して、別の日を設定して自分で監督してやってくれ、と言われたので、そこまでしてテストをやることはないかと思って、やめちゃったのです。授業の中で、学生に基準をしっかり説明すれば、学生自身が納得できる評価ができると思ってやっていた。

それからもう一つ、単位の実質化というところは、非常に厳しい先生というイメージを学生はもつのではないかな。そこは、僕自身が学ぶべきところがあるなあと思いました。といっても、僕は2015年7月でもって完全にリタイアしたので、今後の授業に活かす方法はまったくないので参考にできないのですけれども。ただ、あまり厳しくすると学生は敬遠しないかな、という心配があるのと、もう一つは読書課題が、私が接していた学生にとってはかなりハードな感じがして、きちんと読めてそれについて何か書けるのだろうか、話し合いができるのだろうか。僕は何か読ませる場合は論評しろといって、テキスト批評³⁾という形でのレポートを求めているのですが、こういうもの(中村「リーディング課題-2015年の例」)を読ませて、ああ難しかった、という感想ぐらいは述べられるかもしれないのですが、どうなのだろう。こんなハードなことをやらされるのだったら、受講生が減ることにならないだろうかとかという、非常にシンプルな疑問なのですけど。

(中村) 単位の実質化については日本の大学教育の課題として指摘されて久しいので、私だけが言っているわけじゃないので。ただし私の授業は卒業単位にもならないわけだし、私はこの大学の他の学部の授業と同じようにやろうとしているという、ある種の宣言でもあって。それについては今まで何の不満も出たことがないですね。受講生は減った年もあるけれど、減ったら減ったでいいかなと考えています。

リーディング課題に関しては、実は石附さんのものにしてもデューイにしても、プラグマティズム、マイケル・アップルも、立教の[学校図書館司書教諭コースの]学生は、教職課程なり、初等教育専攻の授業でちらっと聞いたことがある、もしくは読んだことはなくても知ってはいる感じがします。だから読ませて何か書かせると、デューイは、教職の授業で△△先生が○○と言っていたのだけど、みたいな話を書いてくるし、アップルも、教育社会学で有名な北澤毅先生が教育学科のほうにいらして、もしくは教育社会学系の授業を教職で取っていれば、アップル的なものはおそらく話題になっている。アップルのこれ自体は読んだことはなくても。

私が思うに、私の授業の学生にとってのオリジナリティは、デューイとかアップルとか、聞いたことあるけど、本文を読んだことがなかったところに、私が苦労して(笑)、印刷はもちろんやってくれる人がいるのだけど、その人に頼んで、ある部数を整えて、毎回忘れないで適切なものを持って行って配る。それも変な話、手間かかるわけよね。要するに聞いたことがあるけれど、読まなかったとか、図書館にわざわざ自分で借りに行こうとは思わなかったけど、これは重要文献として何度も名前を聞いていた人だ、みたいなものの、資料が配られることに対して、否定的というよりは、あっ、こういう資料があったのだ、って。

ただし、私の期待は、毎回リーディング課題を見せる時に目次も印刷していて、注釈も印刷しています。で、目次を見せているのにもかかわらず、過去に私が配っているものの前後を読みたくなくて借りに行きました、というのをわざわざ私に言いに来た人は、ごく数えるほどしかいない。だから私からしたら、1章だけ配っているというのはすごい甘くしていて、1冊読んでほしいけど、ここだけ最低、見てねというところを印刷しているから、興味をもって自分で開いてくれることを期待しているわけですね。でもそれを実際に読んで、あとか

ら「先生、私、あれは面白そうだったから読んじゃった」と言ってくれた子は、本当にもう数えるほどしかいないです、残念ながら。

でも、何だろう、一人でもいればいいような気もするし、「図書館概論」の中で、地元の公共図書館で私が配った章の前後を読みたくなって借りてきた、というのを自慢げに（笑）、自分のリアクションペーパーを回覧する時に、私は実は全部読んだんだという感じにいる子もいなくはないのですよ、たまに。だからまあ、リーディング課題もそんなにすごくタフ、というよりは…

あと、もう一つ言ってるのは、「司書になりたい、とか、司書教諭になりたい、私は昔から本が好きで」、って言うから、じゃ本が好きなら読んでもらおうじゃないの、っていう感じで（笑）。そういうふうに言うと、「あ、私の好きだって言ってた本は〇〇みたいなので」とかって言ってくるから「そうなんだ、学校図書館にあなたの好きなものだけ並べるのですか」という話をして、読んでもらいますっていう…

このやり方、実はアメリカの[ライブラリー・スクールを含め]大学院では、リーディング課題のない授業は有り得ないのですよね。毎回死ぬほど読まされるので、毎週本数冊読んで来いというのがあるわけだから。それを真似ています。でも変な話、リーディング課題というのはアメリカの大学院の基本的な教育方法としてあるのだけれども、読んだふりをいかにできるようになるかの練習でもあるっていう話なのよね（笑）。で、司書ってそれじゃない？（司書が図書館の本を全部読んでいるわけではないという意味で。）だからざっと読んでくるのでもいいから、とにかく読んで来なさいと。

ただし、立教の学生は、私の知る限り、ざっと読んでくるようなことはしない。線引いて読んで来ますよ。線引いてメモ書いて読んでくるし、リアクションペーパーのお題っていうのも、2～3回やると、勝手に次のリアクションペーパーのお題はこれじゃないかっていうのを推測して、キーワードのメモ作って来ます。ノート作ってるもの、読書ノート。だから、私が思っているよりずっとやるので、全然心配していません。

（足立）そう言われると突っ込めないです。（笑）

（中村）やっぱりね、教員が学生を期待しなさすぎだっていうのが私の考え方なのです。やらないだろう、やらないだろう、って言うてるから…。私、ちなみに授業評価アンケートするじゃないですか。そうすると自分たちで、よく授業外で勉強したというところに4とか5をつけてくるのですよ。私自身の授業は板書がきれいだった（「板書のしかたが適切だった」）→1とか、そういうのしょっちゅうあるわけですよ、私の授業がいい加減すぎるっていうのはね。でも、授業の外で勉強したとか（「この授業に関連して、授業以外に勉強した時間」）、この項目について興味をもってさらに勉強しようと思った（「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」）っていうところに4とか5をつけてくるから、それでよしという考え方です。

私が足立先生にあった質問は、この多様性のところを、今後、私たちがどういうふうに取り扱っていったらいいかという。先生はこういうふうに思われた、っていうことなのだけれど、テキストとしても、もちろん障がい児、今は特別支援教育か。それとの関わり合い部分もいろいろ研究も出てきて、というお話だったと思うのですが、先生のスライドの…

（足立）ただ単にこういう視点もあるよという問題提起をただけで、それが学校図書館の実際のサービスとどういうふうに結びついてくるのかというのはなかなか難しい。だけど基本的にそういうふうを考えていくとね、特別支援教育というのは特別なものではなくて、一人ひとり結局は皆違うのがあたりまえだと考えて、個別の対応で指導していかなあかんという、その姿勢ですね。多元的知能についても、知っているのと知らないのでは生徒への

対応に違いがでますね。その程度のことしか言えないです。説明して、皆さんはどうしますか、っていう、ぼくの話はだいたいそういう「振り」なんです。話を振る、何か話題を提供して、それに触発されていろいろ考えるというスタイルです。実際にそれを実践されたということは後から聞いていないので、まだまだこれからのことだと思います。

(中村) では1回5分ぐらい休みますかね。で、30分ぐらいには戻ってきていただいて、そして手をあげるのは恥ずかしいけれど、何か質問があるよという人はどうぞその紙に、アンケートを早めに出していただくと、私たちが拾えれば拾います。手をあげていただける方がいればその方を優先して、手をあげていただいて質問というのを30分から始めたいと思います。一旦終わります。

質疑応答

(中村) では質疑応答で先に手を挙げて何か聞いていただける方がいらしたら、どうぞ。マイクが有線なので、この辺に出てきていただかないといけないのですが、お願いします。

では紙で出していただいた方で、ちょっと趣旨も含めてご意見も含めて説明しながら質問していただける方がいらしたらどうぞ手を挙げていただければと思うのですが。どうですか。これ(書いていただいた紙)返しますよ。

(フロア1) 中村さんの基準がすごい高いので、僕はアホやと言われるかもしれませんが、ただちょっとすみません、今日の話題に関わってくるということで、お二人に、たぶん中村さんのほうでは答えが出てたと思うのですが、学校経営の「経営」をどう考えるかという問題がやっぱりあるかと思うのですよ。私、受講者に非常勤先で一回最初に聞かれたことがあって、営利企業でもないのに、何で経営やるのですか、と言われたことが真面目にあります。その時の私の回答は、経営って言葉をちゃんと辞書で引きますと、既存のリソースを上手くやりくりするとか、何か計画に対して実行していく全体を指すという定義があるので、それに基づいて、学校図書館に関わる何かやりくりしていること全部ですよ、という話はしています。ただ、そうなってくると、実はこの科目の位置づけっていうのがすごく面倒くさくなってくるところで、例えばPDCAモデルとかPDSモデルという、マネジメントサイクルだけを中心でやるのか、あるいはこれ学校さんによっては総論みたいな形でお使いいただいている学校さんもあるようでして、そこの環境はどう考えるのかというのが大変悩ましいところでもあると思いますので、ちょっとお二人の経営に関すること、フロアの皆さんと共有できればと思ひまして提出させていただきました。

(中村) 総論、って言っているのは、概論のこと？それとは違うの？

(フロア1) 概論ですね。まあ入門編みたいなものとして、要するに入れようと思えば「学校経営と学校図書館」にすべて他の科目も全部、入れようと思えば入れられるので、そうやって扱って。私なんかは実はそっちの面が強いので、ちょっとその辺りのことも含めて…でも経営ということについて気になるところですので、お答えいただければと。

(中村) 足立先生、これは…

(足立) 営利目的でない。これはよくある質問だと思うのですが、まあ、ドラッカーなんか読めばもう全然違いますよね。で、それを読んでくれということになるわけでしょうけども、今、学校教育に蔓延している動向として、[営利を目的とする] 企業経営と同じ発想でもって学校教育を考えていこうという、そこのところが違うのですよね。[公教育を目的とする] 組織として学校なり学校図書館が動いている場合は、その組織の経営をどうしていくかというふうに考えたらいいいのではないかな。

私は、マネジメントは基本的にマーケティングとイノベーションという2つの要素でと

らえています。学校図書館でいうとマーケティングは利用者を知ることにあたるわけですね。それは、単に利用者のニーズに応じて利用を増やすためのものではない。これは営利目的で数値目標を上げるために消費者を知るというのと同じ発想になるわけで、そうではなくて、ちょっと込み入ってますけれども、利用者を知って学校図書館のサービスと教育を適合させて、学校図書館の理念と使命を実現するために行うものと私自身は定義づけています。これが正しいかどうかは保証のかぎりではありませんけれども、学校図書館の理念と使命というものを、それぞれの経営者がもっていないと困るのですよね。特に講習では、まず、学校図書館を経営するためには学校図書館の理念と使命というものを自分なりにうち出して、それを教員会議で議論をしてほしいと言っています。そのためには利用者を知らなければいけないわけですからね。

そういう循環、「利用者を理解し、学校図書館の目的と使命を明確にして利用者に働きかけ、そのフィードバックを受けて自らの行為の結果を省察して、新たな意思決定と実践を行う」…上手く言えないので自分のメモを読みあげているのですが、そういった定義づけでいかがでしょうか。

だから、単なる図式としてのPDCA、それだけのものではない、非常に複雑で込み入ったコミュニケーション活動なのですよ。計画を立てました、はいそれを実践しました、時間が経って、それを振り返って評価しましょう、それにもとづいて次の計画をどういうふうに立てていきましょうか、というようなことではなくて、日常のコミュニケーション活動の中で常にフィードバック回路が成立していて、その中でお互いに学び合っていく。だから教えるほうも実は常に学んでいるわけですよ。利用者からのフィードバックが返ってきた時点で自分たちがやったことがどういう影響を及ぼしたかということを常に知っていくわけですから、そしたらそれに対してどう応えていくか、非常に即興的でしかも柔軟性を必要とする行為だというふうに考えています。

(中村) 実は私は総論的に考えている人なのですけど。私のスライドの印刷したもの(配布資料)の一枚目の右側の下のほうに、「立教[大学]のカリキュラムと履修モデル」がありますけれども、これ順番を見ていただくと、図書館概論の次が「[図書館情報]資源概論」と「情報メディアの活用」とに見えと思うのですけれども、実はこれは単にいろいろな過去の事情がございまして、大学の中に。前任者の経験などもあって、要するに科目によって受講可能になる学年が違うわけね。例えば「[図書館情報資源]概論」は1年生からとれる。ここに書いてあるこの3科目は1年生から取れるっていうだけのことなのですよ、このとり方を勧めているというわけでも必ずしもなくて。でも、「学校経営と学校図書館」をまずとにかく取ってくださいと、司書教諭資格を取りたいと思ったら。で、それをとるには「図書館概論」をクリアしないといけないので、「図書館概論」も取ってないといけないと。で、「学校経営[と学校図書館]」をやった後は自由だけれど、最後に「学習指導と学校図書館」をとってくださいと。「学習指導と学校図書館」を先にとって「学校経営[と学校図書館]」を最後にとる、っていうのは立教のカリキュラムだと混乱するよ、と説明しているのですね。入門的な科目であり、総論的な科目であるということで、この『[学校図書館・司書教諭]講習資料』っていうのもやっぱりそういうテキストだと思うのですよ。かつてはこの1冊で司書教諭講習、全部の教科書だったわけでしょう⁴⁾？今でもそういうふうに行っている人たちがいるのかわからないけど。だからまあこれには全部入っていますので、で、私の授業の中ではこれとこれはこういう意味があって作られたもので、これとこれは背景がこうでこうで、というのを講義していたので、いちおう、全部が、この1冊で総論が終わる。でもそれで全部が理解できると見てなくて、いちおう触れられて、ざっと見たことがある、という感

じでした。だから経営という言葉はどういうふうにとらえるかというのが非常に難しくて。私、2～3年前、経営学部の大学院のほうの教員たちと公共図書館経営についての授業と一緒にやったりしたのですけれども、日本のやっている経営学が、アメリカの大学院でやっているマネジメントの授業の翻訳ではなくて、独自のものを作ろうとか…。いろんな人たちに会って、学術的な、経営学の背景のある授業をしたいと思ったこともあったのですが、なかなかそこはできてなくて、学校図書館の総論みたいなことに留まっていて、さっきちょっと勢いよく言ったような、大学のレベルで立教の学生が手応えを感じてくれる授業をしたい、ということを見ると、経営学部の学生が私の授業に来た時に面白いと思って手応えを感じるかは全然それはまったく違う気がする。だから経営という言葉が私の授業の中で、大学で扱われるべきレベルで議論できているか、っていうと、もうそれはできてません。

(フロア2) ちょっとよろしいですか。

(中村) はい、もちろん。

(フロア2) 記憶がちょっとあまりにも前のことであれなのですが、これ、学校経営の科目名を決めるときに、どうしようかっていう議論があったと思います。「学校図書館通論」ではなくて、もっと学校図書館というものが、学校全体の機能の中で位置づけられてやらなければ、見られなきゃいけないし、働きも学校全体に及ぶようにしなきゃいけない、っていうことを、皆で委員会（学校図書館の充実等に関する調査研究協力者会議）でカリキュラムを決めるときに検討した記憶があります。で、苦肉の果て、「学校経営と学校図書館」。経営っていうのが、なんて言ったらいいのだろうな、どう図書館っていうものを全体の中に位置づけていくかという意味合いが強いと私は解釈しているのですが。すみません、なんだかちょっと…ごめんなさい。

(足立) [フロア2の] 先生のお話で思い出したのですが、私はこのテキストの中でものすごく共感して自分の学校での図書館経営とも関連づけて講習で話した部分が、このテキストのどこだったっけ、「学校図書館経営のための諸組織」っていうところがあるのですよね。おそらく執筆されたのは天道[佐津子]さんじゃないかな。「図書館部」っていう、ものすごく違和感がある名称ですけどね。わざわざこういう名前をつけられたというのは、学校の中の組織図を書いておられるのですよね。校長がいて、その下に職員会議があって、その下に教務部とか進路部とか生徒指導部というのがあって、その並びで図書館部、っていう。だからこれは複数の教職員がいる一つの部署として位置づけられる。そのうえに図書館運営委員会とメディア選定委員会というものがある。そしてさらに児童生徒図書委員会がある。図書館部と運営委員会とメディア選定委員会と児童生徒の図書委員会と、こういったものが学校の経営組織図の中にきっちり位置づけられている、というところは非常に参考になった。

なぜそこが参考になるかっていうのは、図書館が孤立して、独自にやっているというだけでは、他の先生を巻き込めないのですよね。ただ単に授業で使ってください、とかお手伝いしますというだけではなくて、実際に当事者として、つまり図書館運営委員会とか、メディア選定委員会に入って図書館の経営について何かひとこと言えることでもって当事者意識が生まれてくる、先生方のね。ということが非常に重要だと思って、図書館運営委員会というのを私が勤めていた学校では作りました。図書館とは別にね。図書館運営委員会は月1回、メディア選定と兼ねて開いていただく。できるだけ多くの先生方を巻き込むために、任期は1年として校長の任命による。それも経験したことのない人を優先的に、っていう、だから何年かすると全員があたる。2回目3回目になる人もいる。メンバーは各教科と学年を全部カバーできるような人選という…そういうことを考えたのは、どっちが先だったかよくわか

らないのですけど、この章を読んでもものすごく勇気づけられた。あー、僕が考えていたのは的外れではなかったなあと考えたことを今、思い出しました。ありがとうございます。

(中村) 今のところじゃないけれども、学校経営そのものの研究っていうのが、結構、管理職の再教育の問題とか出てきて、最近なのじゃないかなって気が…。結構、学校経営の本をいろいろ買ってみたりしたけど、要するに経営学そのものと学校経営学っていうのはまたちょっとたぶん乖離があって、で、学校経営学から何か学んで授業やろうと思っていろいろ読んでみてもなにかピンとこなくて。で、却ってこういうものの現場の中で図書館がどういうふうなところが結構、参考になったりするというところで。経営っていうのをどういうふうに取り扱っていくか、というのを私は本当にわかってないのですけれど。(フロア1) さんからも、今のを聞いて何かあればどうぞ。

(フロア1) 参考になるか…と思いますが、いちおう、私がやっている実践の場合ですと、経営を一番最後に回しています。PDS、PDCAを一番最後に回して、つまりこれは全部の要素を理解していないと、そもそも何をしたいか、Plan、Do、Seeで何をやっていいかわからないっていうのがあるので、一番最後に回しています。ただそれをやるとたぶん学部生だと本当にわからないですね。経営っていうのも全然これから勤めるかどうかわからないというところで。で、いかにどうかわからないのですが、朝陽第一小学校の学校図書館の組織図、あれを教材で出して、五十嵐[絹子]さんが出している実践のビデオありますよね、2002年かなんかの、あれを見せて、はい、これ全部上手く運営するためにはほら、校長からここまで全員動かなければいけないよね、で、ここにこの組織がなかったらあなた一人で頑張ってもどうしようもないよね、というオチにもって行くという形なので。わりとだから、工夫して実践からあげるというのは自分の実感としておっしゃる通りかなと思います。

(中村) ありがとうございます。はい、では他に、紙を出していただいた方でも。どうぞお願いします。

では(手元にあるアンケート用紙に記入されたものから)一こ。リアクションペーパーのお題というのはどういうものか、っていう話なのですけど、「リーディング課題に関連したテーマを与えて書かせているのでしょうか?その評価のルーブリックは事前提示されてはいないのでしょうか?」ということですね。

えー、リーディング課題に関連したテーマを書かせています。例えば、さっきのわかりやすいのというと、『オフィシャル・ノレッジ批判』というのを読んできてもらいますよね、マイケル・アップル(Michael Apple)の。そうしたら、今日、お昼にごはんを食べながら足立先生と話していたら、なんでこんなラディカルなものを読ませているのだという…で、私、リーディング課題というのは、昔はもっととんでもなくラディカルで(笑)、『脱学校の社会』とか、本当にいろいろなものを試行錯誤したのですよ。それでやっぱり恥の多い生涯で、本当に反省して、外したり入れたりしたのですけれども。例えばマイケル・アップルのを読んできてもらったら、「教科書について考えていることを書きなさい」というふうに、別に学校図書館のことを書かなくてもいいわけなのだけど、まあ学生の方がある意味大人でお察ししてくれるので、教科書と学校図書館の関係を書いてきたりするという感じなのです。

その評価っていうのはですね、すごく正直に言うと学生に聞かれては困るのですけど、リアクションペーパーについてはあんまり厳密に評価をしていなくて、全部返すってことに、私テストも返しますけど、リアペも返すってことにして、だから思いっきり書けと言っているのです。で、一学期が終わった時に…まあ途中から同じ人物が重なるように整理して、そうすると学期末にもう一回ざーっと読んでみると、その子が何を考えて

きて、どんな感じに書けるようになってきたかとか、読めるようになってきたか、っていうのがわかるので、それを評価している。それに加えて普段からグループでディスカッションさせている様子というのを見ているので。でもこの部分、そんなに点数差がつかないわけです。私の成績っていうのはですね、変な話、テストの暗記のところですごい差がついていたりして、それ以外のところは[授業に]ついてくるだけで、結構やっている人たちなので、差がつかないようなところがありまして。足立先生もおっしゃっているように、考えさせているわけなので。ですから答えはないんですけどって足立先生がおっしゃってたのじゃないけれど、答えがなくてやっているようなところがあるわけじゃないですか。教科書っていう存在に意義があるかとかないかとか。

教科書を相対化するために、オフィシャル・ノレッジを相対化するための装置として学校図書館が使えるかもしれない、っていう話なのだけど、それにはどんなコレクションがあればいいのかとかをディスカッションしたり、それは全部、学生たちの主体性に任せてグループの中でディスカッションが起きるから、だからそのやっぱりそれを評価するっていうのはとても難しくて。

しかも今の学生は、ちょっと慣れてくると、人の話を聞くのが本当に上手なですよ。一人でずーっとしゃべっているっていう学生はいなくて、皆で、しゃべっていない子がいるなと思うと、〇〇ちゃんはどう思うの？なんて聞いちゃったりして、慣れれば結構上手にグループディスカッションをやるので、そんなにグループディスカッションで減点したいというような場面に出会ったことがないのですね。まあ本当にコミュニケーション能力がいなくて困ったなという学生が図書館概論にいる時はちょっと声かけたりしていますけど。これはルーブリックとかは作ってないです。

ただ、授業の評価で何に対して何%なのかっていうのは言っているわけですけど。「出席」が何割で「積極的参加」が何割だというのは私の中の秘密になっていて全然言っていない。あまり誠実ではないかもしれないですね、言われてみれば。

何か？

(足立) ちょっと今の話で。さっき(昼食時)、マイケル・アップルのことを話したときに話題にしたんですけど、ダイアン・ラヴィッチ (Diane Ravitch) っていう人がいますよね。彼女は教育史学者で、父親のジョージ・H・W・ブッシュ大統領のときに教育省の副長官をつとめ、息子のジョージ・W・ブッシュ大統領がNCLB法を公表したときも、それを支持した。政策決定の現場をよく知っているわけですよ。その彼女が一転して、あのやり方は間違っていた、ということで今、アメリカの教育政策の批判をやっている⁵⁾、2013年に出た *Reign of Error* という本は素晴らしい本だと思って、翻訳が出ていないか、さっき検索したら、ありましたので、これもぜひ中村さんのリーディング課題のテーマに… (笑)。で、日本語訳はねえ、英語のタイトルはかっこいいですけど、*Reign of Error* って非常に端的で。日本語は冗長なのですよ。『アメリカ 間違いがまかり通っている時代』(東信堂, 2015)。ちょっとしまらないのですよ。でも副題がよくわかります。「公立学校の企業型改革への批判と解決法」。これはとてもいい問題提起だし、解決法まで書いてあるということで、参考になるのではないかなと思います。教育学のほうで扱われているかもしれませんが。

(中村) リーディング課題をどうやって選んだのか、っていうのを今日、お昼ご飯を食べながら質問を受けたりしていたんですけど、教材について考えさせるっていうのと、教科書について考えさせるっていうのと、学校図書館が図書館である、プラスアルファ、デューイっていうのをやっぱり読んでほしいなって思って、という基準で選んでいて…アップルはラディカルすぎるから少し考えたほうがいいかもしれませんね？

(足立) いえいえ、そこまでは(笑)。ついこの間も『学校と社会』を読んだのですが、先ほども言われたけど、特定の章だけを読んでもいかに理解が不十分かを思い知らされました。この中に読書会で一緒に読んだメンバーが何人かいるのですけれども、全章読んで、ここ(第3章)の図書館を中心にした学校の概念図の意味はこういうことなのか、ということが、おぼろげながら輪郭がつかめてきた、というようなことなのでね。ただ、読ませることに意義があるという話だったので、あまり理解を深めるとかどこまで理解しなければいけないということまで求められていないのだとしたら、それはそれで学生の時代はどんどんわかってもらわなくても、背伸びをして高度な本を読んでみるのはいいことだと思います。で、また何十年か経ってもう一回同じ本を読んでみて、あの頃は青臭い理解しかできていなかったのだと思う経験も重要なことだったりもしているのです。

(中村) 読めばいいということはないですよ(笑)。そこから考察させているのだけれど。ただ考察はもちろん、本として全部読んできているわけじゃないし、限界があるよね、かつ時間も限られているからディスカッションも限界があることをこみこみで…デューイそのものの授業にはできないわけじゃないですか。そういう問題はあるわけですよ。限界という。

何か他にまだ質問があれば。

(足立) 書いたのにまだ扱ってもらってないというのがあれば。

(中村) では、お二人から来ているのを読んでみると、「単位のために履修する学生(アンケート原文では「生徒」)がいる場合、講義の中で専門的なことを取り扱いにくいというジレンマがあるが、そのあたりをどうすれば良いか」というのと、「司書教諭養成といって、専任専門でないという現場へ人材をおくり出すというゴールを、どこにもっていくか。司書教諭より“教師”になりたいという子たちに何をおしえていくか」。これ多分似たようなことを聞いておられるのだと思うのですが。

(足立) どうなのでしょう、そういうジレンマ…単位のために履修する。要するに資格は取れるものだったら取ろうかという学生がいるわけですよ。だけど、そのことで、専門的なことを取り扱いにくいというのは…

(フロア3) すみません、質問したの、私なのですけど。

(中村) 前へ来てどうぞ。マイクが、記録を作っている都合から…

(フロア3) 3つの大学で非常勤をやっているのですけれど、実は資格を取らないのですけれども、単位として認定されるようになったのですよね、大学の中で。なので、例えば図書館サービス概論とかやっていて、どうしたらいいのだろうと思ったり、ちょっと本会の趣旨と離れてしまうかもしれませんが、専門性をどんどん伝えたいと思っている中でそういった学生が混じってくる中で、どう考えていったらいいのかなというところが、お聞きしたかったところです。大学側も履修する学生が少なくなっていることもあって、苦肉の策でそういうことをしているというのもあるのかなという印象があるのですけど。

(中村) 履修する学生が減っている、って司書資格のコースの…?

(フロア3) 司書教諭課程の大学もそうですし、司書課程をもっている大学もそうです。司書課程をもっている大学のほうはもとからそうだったみたいなのですが、司書教諭をもっている課程の方は、途中からそうなったので、教えはじめた頃は司書教諭をとる学生しかいなかったのだけれども、途中から…まあ教職は取っていると思うのですけど、そういう学生が入ってきているというところがある。

(中村) 非常勤で行く大学って、批判もできないし、難しいですよ。私ははっきり言わせていただいて、そういう人は来ないでくださいという態度で、重々説明します。このクラス

は資格をとるためのもので、こうこうこうでカリキュラムはこの中のここに位置づいていて、こことこの科目取ってないのに、今いるあなたは…という感じで初回にさんざんやっていた、前の大学では。で、どんどん減って行って…それで噂っていうのがすごいわけですよ。学生に噂立てられるときに、あのクラスっていうのは単位を取りに行けるのだよ、っていうふうになっちゃうともう全学にば一となるから、前の大学では2年目か3年目ぐらいから何の噂が出たかわかりませんが、閑古鳥が鳴いてきましたよ、科目によっては。だから別に…私はでも専任だから、自分が運営するというので、問題はその先に、じゃあ司書課程つぶそう、みたいな話になると、それは大学全体の、私の判断の問題、存在の問題になってくるので、それは最初の戦後史の話よね。だから私学において資格を出すということを人參にしてきたということが今、問われているわけじゃないですか。

でも実質がないものを行っている人たちに対する厳しい目っていうのは学内にもすごくあると思っていて、本当にちゃんとした授業をやっていない人っていうのは、授業評価アンケートとかじゃなくて、わかってきちゃうものですよ。だからその時に甘くすることによって、ウェルカム、ウェルカムってやっていて、自分の専門性のある意味で捨てていると、あの人なんでここにいるのですか、という判断に当然なってくるし、対等な同僚とみなされなくなるとというのが、私の思っていたことです、少なくとも前の大学の経験ではそう思っていた。

32歳で就職したのですが、私なりに…。30代、電車とかで帰りに先生と一緒にになると、自分が本当にみじめになるような教養のある人とか、本当にいい研究している人とかしかないわけですよ、私が前の大学に勤めていた時。電車で一緒に座って帰っても、自分が話していることと、その人—60[歳]とかの先生が話してくれることの深みの違いに泣けてきて、これでもし同じ学生が授業を受けていたら、私の授業、どういうふうに見えるのだろう、っていうのも思ってたから。そういうふうに考えていかないと、大学の中で本当に司書課程なんて全然残れる余地がないというのが私の実感です。

だから、専門性捨てる、っていうか、図書館をわかってほしい[から司書課程の授業でそれを伝えている]、みたいなことって、学会でも何度も出てきた話なのだけど、これは私個人の意見ですけど、本当にナンセンスなことだと思う。非常に専門性が高いことをいかに説明していけるかということが、理論的にちゃんと…そもそも理論がないようなものなのですよ。学校図書館っていうのは理論があるっていうのは幻想だと私は思っていて、それは研究によって思っていて、話せば長くなるのだけれども。吉田右子さんが言っているのですよね、公共図書館についても「学」と呼べるようなものはなく、「論」のレベルであると⁶⁾。アメリカを見ても確固たる理論などないのですよ。だからそういうものを大学の中で、学とか理論として成立しきれていないものを大学で教えていくっていうのはどういうことなのか、っていうことを考えていかないと、とても大学の…。もちろん大学の論理が全部合っているとは思わないし、学術的なものを纏っていればそれが高度な知であって、高等教育で教えるべきものはそういうものだ、そういうことを言いたいわけではないのだけれども、でもやっぱりある程度、そういう文化の中に置かれているっていう状況をふまえた自分に対する厳しい姿勢というか、自分が教えているものに対する見方をもつべきかなと思っていて。私は、理想論かもしれないけれど、基本的には専門性というのは、専門的なものをちゃんと教えていくことを非常に重要なことだと思っていて、その前提となる知がない人たちを何とか教えてください、というのにどこまで対応していくか、私はそれは、前提となるものをちゃんと学んでから出直してきてください、という感じですね。

(足立) これはどうですか。同じことになるのかな。

(中村) 司書教諭より教師になりたいという人たちにどう教えていくか。もちろん、司書教諭も教師なのだからいいのじゃないかな。

(フロア 4) 先ほど足立先生がおっしゃった、マネジメントのところで、いかに先生たちに当事者意識をもたせるか。これはマネジメントの問題にかかわってくるのですけれども、結局、教員として入れば、司書教諭じゃなくても学校図書館経営には関わるよというところが私は一こよりどころかなというふうに思っていて。司書教諭だけが学校図書館を作っているわけではないので、教員として学校に入れば、誰もが学校図書館経営に参加するのだよというスタンスは自分の中でもっているかなというところはあるんですね。

ただ、一教員として、学校図書館経営に参加するということと、司書教諭として学校図書館経営というところの、違いはあるはずなのだけど、教えるときにそれを意識するしない、まあしなくてもいいのかもしれないのだけれど、ただ、受講する側のモチベーションとして、別に司書教諭になりたいわけじゃないけれど、取っておけばいいかなぐらいの感じで来た子たちが半年経った時に、あ、聞いておいてよかった、受講してよかった、これから現場に向けて頑張ろうというふうに、どこまで教える側の自分がモチベーションが保たれるか、その辺なのですね、実は悩みとしては。

(中村) 私の教えている学生は、私よりも頭がいいので、授業の後半になると「あなたの言っていることは」っていうのが、いっぱい出てくるわけよね。例えば「先生の話はアメリカの学校図書館の話と、日本の学校図書館の話、うかがいました」と。その位までいくと相当クリティカルです、彼らは(笑)。それで先生のおっしゃることは、司書教諭はこうふうになればいい、職員のこととか例えばね、話しますよね。そうすると本当に言ってきますよ、批判的に。授業が終わった後、つかまえられて言われたりしますけど。「非現実的だ」とかね。それこそ「私は教師になりたいのであって」じゃないけど、彼らはそういう話をしてくる。でもそれでいいっていうか。私は学術的な立場からこういう現状とこういう歴史があって、とか、こういう理論があって、とかいう話をしているつもりで。で、ここから先は私の意見なのだけども、とか、ここから先は業界に対する不満なのだけども、とか言うじゃないですか。でもそれは議論の種になっているだけで、別になんていうのかな、なんかあんまり…司書教諭より教師になりたいから、中村の授業で教えられていることに疑問…？…

(足立) だけど強制的に受けさせられているのではなくて、自分で選んで受けているわけで、それでも司書教諭資格をとりたくて受けているわけでしょう。だからそれはちゃんと、受けるかぎり専門的なことをやらないと単位はあげないよっていうのでいいでしょう。司書教諭にならなくても役に立つのだということに気がついてくれたらいいということですよね、どっかで。

(中村) 司書教諭、って言っているのは、要するに専任、専従で働きたくはないけど、ってことですよ？司書教諭を受けにくる学生の大半はそうじゃないですか。じゃあ、その司書教諭の資格とはいかにあるべきか、とか、学校図書館経営はいかにあるべきか、っていうのは最後、それこそテストのテーマだったりするわけですよ。それを結局、考えれば、日本の今の現状まで知って、論をいちおうやったと。で、どう考えますか、ってことを皆で話す「だけ」なので。だけど根拠がなく話すのではなくて、私の授業の中でそれなりのものを読んできて、ちゃんと、なぜならっていうことを論理的に自分の意見を構造化して表現しなさい、と言って、それで議論を戦わせて。彼らはいろいろ批判的に言ってくるのですよ。で、もちろん的を射ていたりします。でも考えていない要素があるわけよね。たいていの場合、彼らが何か言ってくる時っていうのは、抜け落ちている要素があるわけですよ。これとこれとこれについてはよく考えられている、で、「私はこう思う」って言っているのだけれども、

でもあの問題はどうするの、っていうのを教師の側から問いかけていくと、彼らが言ってきた意見というのは、ある意味で一面的だったということがわかって。私が足りてないこともあるわけよね。彼らが何か考えてきて、あ、そういう視点から考えなければいけない要素があったのだというふうになれば、お互いそれが耕されていくっていう感じなのかなあ、あんまりそこに問題を感じたことがなかったな…

(足立) 時間がオーバーしているので、最後一つ…

(中村) じゃ最後に一つ何かご質問いかがでしょうか 学校司書との連携についての内容は具体的な実践例を元にしたようなものがありますか？講習の授業内容で…

(足立) 知りません、というか、僕はやってないです。

(中村) 私は経営論の…でも経営論としてはやってますよね？

(足立) もちろん、学校司書の立場や位置づけについては説明しますが…でもここでは具体的にどういうふうに司書教諭が学校司書と連携していくか、というのを説明しているかどうか、ということでしょう。

(中村) 資料はいっぱい最近、出ているわけですね、堀川[照代]先生が調査研究協力者会議(学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議)の座長をされている、今回(学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議)も議論していると思うのだけれど、その一こ前のでも資料が出ていると思うので⁷⁾、そういうものを配って議論したり、職の制度の話の中でしているけれども。あれも結局は多様ですよ、っていう話になっているところがあると思うので、いろんな事例を見せているとか、ここを探せばあるよ、っていう。ただ、立教大学で入れている司書教諭関係の資料を図書館に探しに行くと、いろんな立場から書かれた本、実践を紹介した本があるので、学生はそこの書架の前に行けば、私の話と全部合わせれば、コラボレーションが多様であるということは理解していると思っていますけれど。

(足立) 僕の場合は特にそういう話はしていないのだけど、教職員間の連携ということについては話をしています。特に学校司書っていうのじゃなくて、図書館部があれば、学校司書もその中にいるし、係教諭の先生も入ってくるわけですからね。その中でどういうコミュニケーションを取って行ったらいいかっていう…やっぱりコミュニケーションの基本のところに戻らざるを得ない。具体的な項目についてここはこういうふうに連携してやっていくんですよ、って、そんな話は全然できないのです。

(中村) はい、何か他にご意見や質問があればどうぞ。

時間過ぎてますから、じゃあ今日はこれくらいで終わりにしましょう。すみませんでした、時間の進行がよくなって遅れてしまって。まあ私の授業はこれくらいぱんぱんでやっているといういい例になったかもしれませんね(笑)。

今回は再来月5月29日、…立教大学にて実施しますので、よろしければこれに懲りずおいでください。今日はこれで終わります。ありがとうございました。

1) 中村 川瀬綾子, 北克一「司書教諭講習科目の科目間構成構造と 総論科目「学校経営と学校図書館」の講義要綱の考察」『情報学』8(1), 2011.

2) 中村 文部科学省初等中等教育局長が「学校図書館司書教諭講習規程の一部を改正する省令について(通知)」(1998年3月18日)に付した「司書教諭の講習科目のねらいと内容」。もともとは、1998年2月25日に公表された、学校図書館の充実等に関する調査研究

協力者会議「司書教諭講習等の改善方策について」の報告書に収載されていた。

- 3) 足立 河野哲也『レポート・論文の書き方入門』慶應義塾大学出版会, 2002 (第3版). の2章「テキスト批評という練習法」にしたがって書くことを求めた。
- 4) 中村『学校図書館・司書教諭講習資料』の初版は、司書教諭資格付与の現在のカリキュラムがはじまった1999年で、2012年に出版された第7版が最新のものである。これらがもともと、すべての科目を網羅した教科書として出版されたという確実な証拠はない。この発言は、1955年に全国学校図書館協議会が『司書教諭講習演習資料』をはじめて出版したときの背景を思い出してしたもので、誤解があるかもしれない。
- 5) 足立 Ravitch, Diane. *The Death and Life of the Great American School System: How Testing and Choice Are Undermining Education*. New York, Basic Books, 2010, x, 334p. (本図愛実ほか訳『偉大なるアメリカ公立学校の死と生：テストと学校選択がいかに教育をだめにしてきたのか』協同出版, 2013, 304p.) で、ラヴィッチは自ら関わった新自由主義的な教育政策を反省し、アカウンタビリティ、学校選択、標準テストの得点にもとづく教員評価などを批判している。
- 6) 中村 吉田右子「図書館・メディア・教育：ライブラリアンシップの歴史から見えてくるもの」『同志社大学図書館学年報』No.36, 2010.7, p.73-121.
- 7) 中村 学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議「これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について(報告)」[文部科学省] 初等中等教育局児童生徒課企画係, 2014.

シンポジウム当日回収のアンケート結果

(全提出者12名について質問別に集計；順不同)

Q1. パネラーへのご質問がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
司書教諭養成といって、専任専門でないという現場へ人材をおくり出すということのゴールをどこにもっていくか… 司書教諭より”教師”になりたい子たちに何をおしえていくか。	学校司書
単位のために履修する生徒がいる場合、講義の中で専門的なことを取り扱いにくいというジレンマがあるが、そのあたりはどうすれば良いか	司書教諭
中村先生へ「リアクションペーパーのお題」とおっしゃっていましたが、リーディング課題に関連したテーマを与えて書かせるのでしょうか？その評価のループバックは事前提示されてはいないのでしょうか？	学校司書
「経営」という言葉はどのような意味で考えているか（前に営利ではないのになぜ「経営」かと受講者に聞かれたことがあります。私自身は予定しているもの、既存のリソースをやりくりする広い定義を考えていますが…）	[大学] 講師
ありがとうございました	司書教諭
学校司書との連携についての具体的な実践例とともにしたような内容はあるのでしょうか？（講習の授業内容で）	学校司書
ディスカッションだけで終わると学習の深まりあるいは学習の内容が自分のものになりにくいように思っています。 ふりかえりと分かち合いの往還が大切だと思うのですが、お二人はどのように感じ、実践されていますか？	司書教諭

Q2. パネラーへのご意見がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
「学校経営」という言葉の中に、いかに学校図書館が学校の中で認知され、必要とされる存在としていくかという司書教諭の任務を感じている。その目に見える一番の形がいかに予算をとるかという点である。学校図書館経営の中にこのような点についてのアプローチがもっとあっても良いのではとも思う。	司書教諭
ありがとうございました	司書教諭
小学校で実際に多文化の児童が多いため、蔵書構築や読書支援について悩んでいる学校司書がいますか	学校司書

Q3. この連続シンポジウムで議論したいことなどありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
学校現場では新しい学びのスタイルが求められている、司書教諭が学校図書館を通じてどうそれらに関わっていくかについて（ex. アクティブラーニング、PBL、ICT 活用など） また資料（メディア）の多様化におけるその取り扱い方、情報リテラシー教育、マナー指導のあり方、授業における SNS の活用等をどう教えるか、など現在の学校現場に結びついた教育をどう展開していくか など	司書教諭
5 科目の位置づけ（5 科目とも並列関係か、それとも順序が上位下位の関係があるのか） 担当者の専門性	[大学] 講師

最終的に「学校図書館とは?」「司書教諭（学校図書館員）とは?」というところに行きつくのだろうと感じました。	司書教諭
学校図書館をスルーして iPad を生徒全員に持たせて授業を実施するプログラムが進んでいる現在、学校図書館を学校のカリキュラムの中に取り入れていく困難さをより感じている。この状況はどう対応していけば良いのか。	司書教諭

Q4. 本日のシンポジウムに対するご意見、ご感想がありましたら、ご自由にお書きください。

回答内容	職名
現在3つ（来年度は4つ）の大学で非常勤講師をしています。お二人の先生のお話を伺いながら、自分の講義を猛省中です。質の高い授業をしていかなければならないと痛感しました。とても勉強になりました。今後も可能な限り参加させていただきたいと思います。	司書教諭
学校経営の中に図書館がどう位置づけられるか、というのが、この科目の大きな目標だと思います。「図書館」が主語でなく、「学校」とか「教育」が主語となって考えなければいけない科目なのではないでしょうか？（総論的な科目であります）学校図書館経営をどうするかはもちろんです、学校経営（教育）の中にどうかかわっていくかに視点をおかなければいけないと改めて感じました。	司書教諭
全体としてわからない点も多々あったのですが、自分に関連することについては新たなものの見方を教えてもらった気がします。これからまた今日の内容について自分なりに振り返りつつ、仲間ともディスカッションするなどして考え続けていきたいと思っています。	学校図書館 協力員
学校経営と学校図書館は概論だと思います。他の科目は各論になっているので、学校図書館が存在し、機能するための法的根拠とか校内での組織（校務分掌での位置づけ等）を知るあるいは再確認することも大切でそれを出来るのがこの科目だと思います。お二人のお話を聴いていてこの科目は司書教諭としてのバックボーンになる内容だと思いました。実際現況は一人職場なので、まだまだ認知されていない司書教諭や学校図書館の役割の中で、着任したときに少しでもタフに（現場で物申せる）なれるための科目だと思いました。	非常勤講師
一般教員の養成課程にも学校図書館、公共図書館について学ぶ機会は是非必要	司書教諭
大学で教える現場におられる方々のそれぞれの問題意識をうかがってみたいです（私は学校現場にいます）。司書教諭養成課程あるいは講習の制度上の問題、カリキュラムと教授方法の問題、学生の特質など様々なレベルの問題があると思いますし、どの科目が一番教えにくいのか、など	司書教諭
学生（生徒）にもっと期待していい、すべきということを現場ではいつも教師に言っているのに、大学での自分の授業では低目に設定していることに今さら気付かされました。2016に間に合うか！	学校司書
学校司書にとっても司書教諭が何を学んでいるのか、どのような実践をおこなえるのかとても知りたいと思い参加しました。 司書教諭の役割を知らなければ連携も取りにくいと思います。	学校司書
明日からの用務の都合で途中退出いたします。有難うございました。	—

シンポジウム二週間後のパネラーの振り返り

足立正治

学校図書館理論の確立を目指す中村さんと学校図書館の教育力を高めることを目指す足立。キャリアも生活圏も異なる二人だが、よく話をする。たいていの場合、一つの論点について是非を論じるのでも、相手を説得するのでもない。互いに承認や共感を求めているわけでもない。話は思いもかけない方向に展開することが多く、それが楽しい。自分の思考を拡張するために、相手の存在が必要なのだ。

今回、中村さんの話を聞いて、とりわけ興味深かったのはリーディング課題である。第2回から第7回までの授業の準備として事前に課される資料は、魅力的だ。「学校図書館の歴史(日本)」の準備として梅津郁夫の『プラグマティズムの思想』を課し、マイケル・アップルの『オフィシャル・ノレッジ批判』が「学校図書館の使命・機能概説」の準備として課される。この組み合わせは、どのように発想されるのか。自分だったら何を選ぶだろうか？ 仮想の受講者を対象にリーディング課題のリストを考えはじめるが、実際に担当してきた受講者を思い浮かべて、躊躇する。立教大学は、学生の能力と意識が高いのか、それとも授業者の資質とテクニクがすぐれているのか。そのことを問いただしたかったが、どうやら大学の風土と授業者の意識がカギになるらしい。とにかく実用と効率を求める風潮にあって、大学本来の矜持が保たれていることが重要だということか。

時間があれば、学校図書館の総合的なデザインについても話し合いたかった。人(利用者と専門職)とメディアと場所が関わり合って拡張をつづける学習環境をどのようにデザインするか。そのとき、アフォーダンスの概念はどのように活かされるのか。興味は尽きない。

中村百合子

足立先生のお話を通して、「学校経営と学校図書館」で過去に私が十分に教えてこなかった部分、つまり欠落部分を自覚しました。私個人は、学校図書館の理論というものについてずっと考えてきていて、それを「学校経営と学校図書館」という私が概論と見なす科目の中で教えたいと願い、試みてきたつもりです。とはいえ、学校図書館について、体系化された理論があるのかどうか怪しいと思っている私は、何が学校図書館の理論を作るのか、特にその枠組みについて、考えながら、授業を作ってきました。今もその作業を継続している私としては、重要な欠落らしいものに気づけたことは、大変有意義でした。私は、アメリカ合衆国で進歩主義教育運動を経て学校図書館が誕生したことから、両者の関係を理論の枠組みの土台部分と考えてきました。それに加えて、知的自由と学校教育の関係、リテラシーや学力に関する議論から見えてくる学校図書館の存在意義ということも、理論の枠組みの重要かつ不可欠な一部だと考えていました。しかし、足立先生のお話から、教育機会の保障や学習者の多様性を認める教育のあり方という課題が学校図書館の理論において重要な意味をもつ可能性に気づきました。それぞれの要素についての理解を深めながら、要素間のつながりを見つけていく、最終的には構造化することがこれから私がやるべき作業だと思っています。学生たちに、将来、これが学校図書館の理論だ、と言えるものが示せればいいのですが。